

アズールレーンカツコ
カリ

文系グダグダ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

○○○みたいなものが読みたい。と、自分が思ったので作ったお話

あと○○○流行れ：流行れ：という思いを垂れ流すお話

オリ主にはチエツクをつけているものの、名前ではなく無名の指揮官と言う風にしてます。なので貴方とか指揮官呼びがデフォルトになると思います

ノリと勢いで何かしら独自設定を生やすこともあります。話を円滑に進めたりネタに走ったりするのに活用するので、そんな滅茶苦茶は多分しないと思います

目次

プロローグ（作風・世界観の説明）

1：エンタープライズは指揮官と添い

遂げたい | 1

2：プリンツ・オイゲンは指揮官を見定

めたい | 19

3：ベルファストは譲れない | 38

短編（オムニバス形式）

1 | 55

2 | 68

3 | 83

4 | 97

プロローグ（作風・世界観の説明）

1：エンタープライズは指揮官と添い遂げたい

「指揮官、好きだ。結婚しよう」

乱入者の一言に通常営業していた執務室の空気が一瞬で凍る。指揮官に交渉策について掛け合っていたブルックリンが書類を思わず落とし、秘書艦として指揮官の補助役及びリマインダーとして背後に陣取っているヘレナは思考が止まり、フリーズする。

そして、指揮官のお世話とご奉仕という題目で部屋の片隅で待るベルファストはその眼を大きく見開き、その後の動向を注視していた。

指揮官はそんな中、真正面に居座る乱入者をじいとみる。乱入者は指揮官とは執務机を挟んだ形で見下ろしている。特大の爆弾を落としたと言うのに悪びれも、恥ずかしげも無く悠然としている。

そして、指揮官の反応を……彼の一挙手一投足すら見逃さんとほかの艦など眼中に無いように彼を見ていた。

見た目や服装はいつものノースリーブの白シャツに黒ジャケット、おそらく下半身は黒のプリーツスカートに黒タイツ、そして黒ブーツであろう。

しかし作戦予定のない執務室という空間にはあまり似つかわしくない位に彼女のその身には左側に長大な飛行甲板、右に得物である大弓を……一種の完全武装の状態であった。

「それは、この間の任務で授かったコレが欲しいということかい？」

指揮官がそう言つて、執務机の引き出しから取り出したのはいかにも高級そうな小さな小箱。

その瞬間、エンタープライズ以外の艦は一斉に視線を向けた。任務の報酬として支払われたコレはリングケースであり、その中身は「誓いの指輪」という代物である。

知つてか知らずか指揮官はリングケースをパカツ、と開く。箱の中に収められた、宝石も装飾も無いシンブルなデザインの銀灰色の指輪が覗かせる。

——噂には聞き及んでいた例のモノが現実には……

その指輪の放つ迫力に他に居合わせている艦船は思わず生睡を飲み込んだ。それがヘレナなのか、ブルックリンなのか、ベルファストなのかはわからない。

「いいや、違う。」

指揮官……貴方自身が私は欲しいんだ」

しかし、エンタープライズは眼中になどなかった。そんなものには興味はなかったからだ。

【誓いの指輪】はいわば強化装備の一つ。指揮官と艦船とのさらなる信頼関係と絆を深めることにより、さらなる潜在能力を引き出す……というのが大本營の見解であり、指揮官に人脈と権限さえあれば幾らでも用意することが出来、何隻でも活用することが出来るからだ。

こんどこそ他の艦船は言葉を失った。まさに絶句という言葉が似合うほどに。

もしこの場に居合わせた艦船が気の弱い——例えば、軽巡洋艦のライプツィヒのような者ならば、卒倒しかねないほどであった。

冷たい空気から一変、ピリピリと緊迫した空気が流れる。

恐らくエンタープライズは執務室に赴く直前に、当母港の倉庫に置かれている強力な艦載機を装備し、強化部品も当母港が保有する最高の物品を装備しているだろうということは明白であった。

傍にいるブルックリンとベルファストは艀装を展開し砲口を向ける。電探をせわしなく作動させ動向を伺う。

ベルファストに至っては何処から持ち出したのかナイフ投げのように魚雷を持ち、いつでも放つことができるようにしていた。

ヘレナは指揮官とエンタープライズの間割って入り、指揮官を抱きしめて庇っている。

「ありがとう、大丈夫だ……二人とも艦装を収めて……そうだ。ありがとう、いい子だ。そうか……それにしては、少しばかり物騒とは思うが？」

ヘレナの耳元で囁やき、拘束を解いてもらい、ベルファストとブルックリンの艦装の展開をやめさせ矛を収めさせる指揮官。

そして、指揮官の眼光に対して折れたのか渋々、といった感じに艦装をの展開を解く。この場にいる艦船はなんだかんだといつて、黎明期から建造で引き当てた艦船達であり、付き合いとしては最古参に近い存在であった。

指揮官はエンタープライズが早まった真似をしないことを信じており、また彼女たちは指揮官の指示は見誤ることは恐らくは無いだろうと信頼を寄せていた。

「こんな時、どうすればいいのかわからなくてな。姉や妹にも聞いたが、はつきりできなかった。

だけど指揮官にはわかって欲しいから、この格好にしたんだ。私が冗談で言っている訳ではない」と

理由としては武勲艦らしく、そして真面目な彼女らしい物に、指揮官は微笑ましく思った。

その余りにも可愛らしく思える理由に無意識ながら口角が吊り上り、うつすらと笑みを浮かべるほどに。

「ふむ……君の言いたいことはわかった。

けど、納得したいところがある。君が好きになった理由を教えてほしいな」

エンタープライズとこの指揮官のなれ初めは別に些細なことである。

とある新人指揮官が戦力拡充の為にコツコツと備蓄していたなけなしの資材と資源をつぎ込んで建造した結果、運良く打ち勝っただけのことだ。

「君がエンタープライズか……栄えある武勲艦に力を貸して頂けるとは光栄です。よろしくお願ひします」

普段はどこにでもいるような、よく言えば気さくで人の良さそうな、おおよそ英雄や猛将・智将には程遠いような人間のよう……

彼女は初めに指揮官を一目見た時の印象であった。

事実、彼は兵器である艦船達をヒトと同じように扱い、装備や戦力の拡充のほかにも、寮舎の改築・増築や希望する家具の設置・模様替えを行ったり。

負担がかからないように委託や演習・訓練等の配置転換や、大きな格差が起こらないように練度の平準化や、計画的な強化等を行い。各陣営出身の艦船の文化・陣営の違いで起こる摩擦を少なくするように規律を調整していたのだった。

この間は新人指揮官でもあった為か、大きな作戦に駆り出されることも無く、直接的な脅威度の度合いが低い、後方海域での任務・作戦行動にとりかかってもらいた為に、エ

ンタープライズはこの指揮官を文官出身か戦闘の苦手な内政向きに人間なのだろうと思っていた。

しかし、その艦隊運営における手腕は彼女をも唸らせる程であり、それが大きな魅力に欠けた人物であっても、エンタープライズ含め、黎明期組やそこに近い世代の艦船達にとっては好感が持てた。

だが、彼女はある時を契機に考えを改めることとなる。



きつかけは新規に着任した指揮官のお披露目も兼ねた観艦式と航海演習。

人脈も繋がりも薄い指揮官の為の機会とも、自軍は未だ健在であり、未来の元帥になるやもしれぬ若き獅子達……上層部になりうる程のエリート、国の人的資源が優れていると他方に強調する為の催しであった。

——突然の奇襲

新米もいるが、力を誇示するためにベテランも多数配置されており、このような大戦力に挑む奴はいない……と心の奥底では思っていたのだろう。

そのありえない事が意表を突く形で戦争が始まってしまった。

だが彼は違った。

突如始まった戦闘、演習場として設定された海域は瞬く間に戦場となる中、彼は指示を飛ばす。

いきなりの急変に困惑するエンタープライズ達をよそに、指揮官は意図を説明する。浮き足立っている我々を見て、奇襲が無事に成功したと確信し、胸を撫で下ろして気を一瞬緩めている敵の寝首をかく……と

その時の声は不思議と威厳と安心感に包まれていた。

指示通り進軍し、彼女達の予想とは裏腹に驚くほどに空襲や遭遇戦も無く、恐ろしいほど静かな戦場にて、その指揮を行う敵軍の中枢艦隊に向けて護衛艦隊の一角を食い破り、その手を伸ばす。

作戦行動中、エンタープライズ達の戦闘を阻害しない程度に、しかし矢継ぎ早に指示を飛ばす。

普段とは全く違う、指揮官の声色に艦船達は戸惑いを隠せなかった。

しかし、困惑はすぐに氷解する。

なぜならば、指示通り従った戦艦の砲撃が面白いように敵艦を炎上させ、放たれた魚雷は水平線の彼方から次々に水柱を高々と上げたからだ。

「終わりだっ！」

彼女が放った艦載機はまるで魔法のように、敵軍の迎撃や対空砲火を受けることなく、量産型艦隊の大群に突っこみ、爆弾と魚雷で蹂躪する。

——あの人の指揮の下で力を振るう事に、この上ない快感を感じた。

すべての歯車が噛み合い、面白いように戦果を上げていく様はまるで現実感がなく、非常なまでに高度化された……云わば生きたシステムの様

2 艦隊、計12隻の艦は敵軍を食らい、血を漱ぐ野獣の牙や爪なのだ。

声に成らない断末魔を挙げて、レッドアクシズの艦は爆焰に消える。

彼女が指揮を採っていた旗艦だったのだろう、敵部隊は波が引くかのように急速に後退を始める。

「勝ったのか……」

『各員に次ぐ、敵の撤退を確認した。本艦隊は全艦撤収行い、補給及び艤装の修理に取り掛かる。』

これから起こるであろう追撃戦に関してだが、敵軍は勢力圏内に向けて撤退を開始している。

しかし既に、友軍は対応部隊の編成が終了しており、現在全力で航行中である。快速艦及び空母・巡航全艦を主軸として一部艦隊は敵軍最後尾に位置する殿部隊を足止めしつつ主力部隊を迂回、残存する敵軍主力部隊に攻撃を行い更なる出血を強いる作戦のよ

うだ。

当艦隊は補給と修理が済み次第、後詰と殿部隊の包囲殲滅に取り掛かる。

敗残兵とはいえ、殿を志願する以上敵は一種の死兵である、想像よりも激しい抵抗が予測される。気を引き締めてかかれ。

以上だ。

もう一度、聞いておきたい事はあるか？』

指揮官の指示にエンタープライズが旗艦として指揮を行う艦隊の前衛部隊を務める重巡、プリンツ・オイゲンが眉間にシワを寄せ、不快感と怒りを露にした。

「待ちなさい指揮官！私は追撃戦を進言するわ！

損傷はまだ浅い！このまま敵をもっと、モット沈められる！」

追撃戦は云わばボーナスゲームとも言われることもある、古来より勲功を立てるには一番手っ取り早く、チャンスであるからだ。

それにプリンツ・オイゲンの言う通り、今のところはまだ誰も耐久が危険域に達していない。

弾薬に関してはやや心もとないが、道中の友軍の弾薬集積所を活用すれば良い。そこそ撤退時にレッドアクシズの遺棄した物資としての弾薬と応急措置修理装置や、それを載せた補給艦を篡奪すれば問題は無いだろう。

『却下する。当艦隊は追撃戦に耐えうる能力を有しておらず、作戦遂行における戦闘力を喪失した状態である。』

「だったら、もっと装備を強化しなさいよ！それにもっと強力な装備を寄越しなさい！」
最もな意見だとエンタープライズは思った、だが現実的では無かった。

確かに強力な……金の装備箱からたまに出てくると言う良質な装備があれば、さらに限界の10段階の強化改修を施すことができるのなら、戦闘を優位に進めていくことができるだろう。

——その為だけに、学園の購買部に膨大な資金を費やす指揮官もいると彼女は時折何処からか流れてくる噂として聞き及んでいた。

しかし、金の装備箱から出ている良質な装備は必ずしも手にはいるわけではない。100個もの金の装備箱を開けて手に入らない事もあると言う。

装備の強化改修にしてもそうだ。

強化の際には資金の他に、装備に適した改修パーツが必要になる。始めはちよつとした資金とそこそこの質の改修パーツで賄えるが、強化改修した度合いに応じてさらに多くの良質な改修パーツと資金が費やされる

それを着任して幾ばくもない指揮官にしろというのは酷な話であった。

——さらに指揮官を擁護するならば、着任して短い故に全体的に練度が高くない事も

挙げられる。

これらに關しては時間が解決するのだが、今回の襲撃はそんな指揮官達の艦隊事情も知る由もないだろう。

『それは貴様の無能さ故の事だ。

他に質問が無いようならこれで通信を終わる』

「クソっ！」

指揮官は冷酷に判断を下し、プリンツ・オイゲンに言い渡した。

普段のような覇気もカリスマも無い。ただの平凡な一士官のようにしか見えない彼とは違った一面をこの戦闘を通じて彼女たちは見ていた。

その後質問もなく、時間が押しているのだろう、一方的に通信が切られ、プリンツ・オイゲンは悪態をつく。

「どうする？ アイツに従うの？ エンタープライズ」

「指揮官の言うことは理にかなってる。ここは退こう。」

確かに、殿を務めるのは練度の高い者だ。それに比べて、我々は結成されたばかりの新参部隊だ。だから、万全をもって事にあたるのは間違つてはいない。

そして、既に追撃用の部隊が向かっている以上、戦局はそう悪い結果にはならないだろう。

むしろ、功を焦って損害を出しては、相手が勢いづいてしまうからな」

エンタープライズは指を折りつつ、理路整然に撤退理由についての考察をプリンツ・オイゲンに言い聞かせる。

「……ふん、つまらないわね。」

凡夫にしては頭が随分キレるのが余計に」

「ですが、まだお若いというのに、布陣を掻い潜って指揮中枢を一気に叩きのめすその手腕は私達にとってこれ以上なく頼もしい物です。」

ロイヤルメイド隊のメイド長としても……私個人としましても、誠心誠意を以てご奉仕するに十二分に値いたします」

「指示通りに雷撃したら、面白いように次々当たって、綾波は楽しい……です。」

頼もしい指揮官はバッチコイ……です」

つまらなそうにするプリンツ・オイゲンに対して、ロイヤル所属の軽巡洋艦・ベルファストと重桜所属の駆逐艦・綾波は異なる意見を述べた。

「ふーん。じゃ、あんた達はどうかなの？アリゾナ、イラストリアス」

「指揮官様はこの戦いの勝利に大きく貢献し、イラストリアスの期待に correspond してくれました。」

だから、イラストリアスも指揮官様の事を認め、この艦隊に勝利をもたらす為に、微

力ながら尽力したいと思えますわ」

「私は……指揮官様なら、仲間を失わずに戦っていけると、期待しています……」

その為に私の力が必要ならば……私はこの大砲で以てこの力を奮いませよう」

ロイヤルの空母であるイラストリアスとユニオンの戦艦、アリゾナの両方は、かねがねこの若き指揮官を有望視する意見であった。

これ以上意気地になっても意味がないと感じたプリント・オイゲンは軽くため息交じりに肩をすくめる。

「そう……観念するわ。」

エンタープライズ、信号弾を、撤退しましよ」

エンタープライズは事前に支給された信号拳銃を取りだし、撤退の合図として指示された弾薬を装填する。

予期せぬタイミングで始まった初めての实战。その興奮と死への畏れ、そして勝利の酩酊感をミキサードでグチャグチャにかき混ぜたようなような感情を胸に、信号拳銃を空に向ける。こわばった指がトリガーを引き、撃針が薬室を撃ち、硝煙を立てた時、生の充足が魂を震わせ、肉体に溢れる。

——これが戦争だ。

——戦いに次ぐ戦いの幕開けなのだ。



「ふむ、つまりは……一緒に過ごし、共に戦ってきたから……と」

「む……そのような単純なものではないのだが……」

エンタープライズの『指揮官の好きな所』話をにべもない形で総括する指揮官に不満げな表情を浮かべる。

「まあいい、指揮官。答えを聞かせてくれ」

しかし、論点はそこではない。

彼女にとつては指揮官の是非を問いたいからだ。

「……そうか、気持ちは嬉しいが……断るよ」

指揮官はエンタープライズから視線を外し、目を瞑りしばし黙考する。

そして、考えを巡らせた後、本当に言ってしまったも構わないだろうか……といった風に躊躇しつつも、落ち着きを払い、聞き間違えの内容なはつきりとした声色でエンタープライズに答えを伝えた。

「っ！……そうか……しかし、なぜだ？なぜなんだ？」

指揮官の明確な拒絶に彼女の瞳が大きく揺れた。

しかし、一抹の希望を持つため、理由を問いたです。

「それは私は人であり、君は艦船……兵器だからだ」

絶句。

今まで動じなかったエンタープライズが目に見えて狼狽えた。

しかし、周りの艦船達も指揮官のその言葉にひどく動揺を起こした。

「ご主人様、私たちにもわかるように、ご説明をお願いいたします」

言葉が出ない艦船の中、いつもとは違う、震えの混じった声でベルファストは指揮官を問いたです。

「君たちは我々人と同じような体を持ち、感情を持ち、心を持ち、自らの意思でもって自立できる。

そんな君たちをモノとして扱うものもいるだろうが、私にはそうは見えない。

生存の為に意思を持って行動する。それはいわば、生命に近いものだ。そして同じことが出来るのならば、人間と同等に扱うべきだ。

だが、生命とは違い、生み出すことをしない。

細胞分裂によって生まれる我々とキューブから生まれる君たち……根本から違う以上、どこかで線引きされるだろう。イルカとサルが交配できるかね？」

執務室内に重い空気が流れる。

指揮官の意見はもつともな意見でもある。

人と限りなく同じでかつ意思の疎通ができるが異なる生き物であり、生命の根幹として子孫を残すなどできない。だからエンタープライズの求めには応えられないのだ。

「確かに、私とあなたは違う。」

私は兵器、貴方は人。

子供だつて産めるかわからない、貴方を悦ばせる事ができるかわからない」

しかし、それくらいで引き下がる彼女ではない。

「だけど、貴方を愛しているんだ。止められないんだ」

執務机をドンと叩き、指揮官に詰め寄る。

興奮からか顔色が少し上気している。

「戦争が終わったら貴方はきつと軍から離れる。」

そうなったら私はもう貴方の側に居られない、そんなのは耐えられない！

逢えない時間を全部、側に居られる一日に引き換える事が出来るのなら、惜しまずに差し出そう。だって、貴方を愛しているから、好きだから……」

肩を震わせて、涙を浮かべながら語る彼女には、指揮官もその思いは本物であることが容易に察することが出来た。そして、エンタープライズは指揮官の右手を取り、両手

で包み、自らの胸元に寄せる。

「貴方の側に居られるなら愛人でも何でもいい！ 貴方が望む事ならどんなことでもな
んだってする！」

だから……私を連れて行って、もらえないか？」

そう語るエンタープライズ。だが、他の艦船は知っている。

——これは宣戦布告である。

その手をつちりを捕まえているのはエンタープライズは指揮官の事は絶対に逃が
さないという意思表明。

周りに最古参の一角である艦船ばかりにもかかわらず眼中にないこの行動は指揮官
を独占したいという意思。

それがそう思つてか、無意識なのかは知らないがエンタープライズははっきりと意思
を示していた。

そして、それを察したベルファストはその眼に光を宿した。その言葉にヘレナをブ
ルックリンの両名も目に光と欲望の炎を灯す。

「兵器は人を選べない、だが私は貴方に使われたい。貴方の指示でその力を使いたいん
だ。

それに生き物が異なる？ それはどうした？

指揮官、貴方はとても素晴らしい人だ。……けど私は兵器でありながら人である貴方に劣情を抱いている、欲情している性癖倒錯者なんだ。すまない」

指揮官は常識的で良識もある。裏目に出たと言えるが、これでは酷と言う物だ。

「私は他の国の艦船のような魅力も、姉妹と比べてもあまり面白みがないだろう。

だけど、指揮官。貴方が望むなら、私はそのすべてを受け入れる。どんなことも喜んでやってみせよう。

たとえ戦いが終わったとしても、私は貴方についていく。

だから指揮官……

——私を貴方の色に染めてくれないか？」

後に最強と謳われる大艦隊の中樞を担い、仲間から提督と呼ばれたこの指揮官の決断が、人と艦船という間柄に影響を及ぼす事を知らない。

2：プリンツ・オイゲンは指揮官を見定めたい

——エンタープライズが指揮官に求婚を迫ったらしい

鉄血所属の重巡洋艦、プリンツ・オイゲンはそんな噂を聞いた。

出所は母港内の食堂にて、ユニオンカロイヤルの艦船が雑談に興じているその時にこのフリーズが耳に入った。

昔はまだ母港の規模が小さく、規律も規範も整備されきっていないかった為に、食堂で偶々所属の違いによる艦船がかち合った場合、大抵は味方同士の小競り合いがあつた頃と比べると、全く違う。

寮も施設も大きくなり、同じ鉄血所属艦船も増えて、大学が新設され、所属の違いから生まれる過激な軋轢も確執も消え、大変住み心地が良くなつて来たと彼女は感じている。

そんなプリンツ・オイゲンだが、その噂の渦中の人物であるユニオンの正規空母であるエンタープライズとは、ともに肩を並べて、この母港の黎明期を支えた古強者であつた。

プリンツ・オイゲンが前線を支え、相手を消耗させてから、エンタープライズが決定

打を放つという戦術は、当時戦力に乏しかった当母港に大きく貢献し、幾と度なく勝利をもたらしてきた。

黎明期を支えてきた艦船は例外なく総じて練度が高く、精鋭ぞろいである。また、指揮官との付き合いが長く、現在ではめつきり見なくなつたが、現地における戦闘指揮について、指揮官から直接の手ほどきを受けた事がある。

よつて、指揮官の意図や考えをすぐに推察でき、また重要な局面においてはその圧倒的練度だけではなく、艦隊の旗艦や、前衛部隊の先頭に立ち、勝利へとつなげる重要な立役者としても大きな役割を果たす。

それ故に、当母港では所屬・艦種を問わずに羨望を受け、演習に出てくる際には他母港からは指揮官の親衛隊と呼ばれる事もしばしばあつた。

(ふーん、エンタープライズがねえ……)

ヴルストを齧りながら思案にふける。

彼女にとつてエンタープライズは真面目そのものであり、融通の利かない面倒な女と思つている。

初期の頃では上官の命令に忠実すぎる節もあり、初めて現地での指揮を委任された際には、当母港初の前線での実戦参加ということもあり、不慣れではあつた。

(でも当初臆抜け野郎と思つていた指揮官があんな人だなんて、あの時初めて知つたわ

……

あの時から、指揮官の事を私を本気にできる人と感じ始めたのよねえ……)

初めての実戦が相手側の奇襲から始まるという中々ハードな状況にて、彼女が敬愛する指揮官は事態を好転させるきつかけをつくったあの戦いを思い出していた。



「皆さん！ 大丈夫ですか！」

つまらない演習の筈が、突如として始まった奇襲で、実戦に変わってしまった。

幸いにも、実戦経験のなさそうな指揮官が持たせた——見栄のつもりかどうかはわからないが、装備によって事なきを得た。

先程の声を発したイラストリアスから、戦闘機が射出される。

金の装備箱から出てきた良質の装備でかつ、きちんと強化改修された戦闘機が奇襲としてプリンツ・オイゲン達に襲いかかってきた攻撃機や爆撃機を叩き落としていく。

「……ふん。どうやら面白くなってきたわね」

「笑ってる場合ではない！ だれか指揮官と連絡できるか？」

ニヤリと笑みを浮かべて呟いた一言はエンタープライズに聞かれていたようで彼女

は嫌な顔を見せた。

こうしている間にも状況は転々と変わっていく。対空砲火で周りに被害を出させないように弾幕を張っていたアリゾナであったが、空襲が止んだこともあり一旦落ち着いていた所に向かって、魚雷の雷跡が迫っていたことをプリント・オイゲンは見逃さなかった。

「キャツ……すみません、ありがとうございます」

「別に良いわよ、これくらいなんともないし」

アリゾナから雷撃を庇ったプリント・オイゲン。しかしその傷は浅く、無傷にも等しい。

（全く、バルジに応急修理装置なんて味なもの持たせて……）

「……指揮官！聞こえますか……はい、はい……わかりました！」

皆さん繋がりました。通信回します」

プリント・オイゲンの中で指揮官の有能さを上方修正すると共に、僚艦のヘレナが指揮官との通信の復旧に成功する。彼女を中心に指揮官の艦船は集まった。

『唐突で申し訳ないが、部隊の編成を行う。人員を第一艦隊と第二艦隊、残りを後方支援隊で構成する。』

エンタープライズ。君は第一艦隊・主力部隊旗艦として、主力二番艦、三番艦にはア

リゾナ、イラストリアスが担当しろ。続いて第一艦隊・前衛艦隊にはプリンツ・オイゲン、綾波、ベルファスト、三人が担当しろ。第二艦隊と後方支援隊の細かい内訳は電文で追って知らせる。

ただ、後方支援隊の旗艦としてはヴェスタル、君が担当してくれ。第一、第二艦隊が必要とするあらゆるサポートを引き受けてやって欲しい。

大まかな指揮や指示はこちらで行うが、私が干渉できない範囲……つまりは現場での最前線の状況にあわせた指揮は第一艦隊旗艦であるエンタープライズに一任する。こんな状況だ。なにかと忙しいとは思うが、うまくやってくれ。

では、本題に入る』

混乱により通信の混線が落ち着いたのか、指揮官との通信が復旧した矢先に突拍子も無い指示が飛ぶ。

『現在、我々はレッドアクシズの奇襲攻撃を受けている。部隊間の連絡網と指揮系統が麻痺し、それぞれの艦隊は孤立していると言ってもいいだろう。一部の友軍が反攻や抵抗も見せてはいるものの、散発的であり決定打に欠ける。

そんな中、敵軍は我軍の中核でもある最上級司令部付きの艦隊に対して包囲網を築いている。この艦隊には元帥閣下も含まれており、もしこの艦隊が敵の手に落ちれば、致命的な損失を被るだろう。

そこで、当艦隊の目的としては元帥と上層部が居る最上級司令部付きの艦隊に迫る侵攻部隊の阻止だ。しかし、この小規模艦隊で目的を遂行するには、電撃的な突入作戦でケリをつけるしかない。前線を突破して、敵陣深くに侵入、敵が防衛・迎撃の態勢を整える前に主力が指揮中枢を叩いてもらう。

敵侵攻部隊は、包囲戦のため比較的広い部隊間隔で展開している。また、余程急を要したのか、戦艦等の低速艦が目に見えて少ないことが確認された。しかし、作戦に手間取り時間をかけてしまえば、後詰めとして戦闘地域に顔を出すかもしれない。

相手の命令系統が無くなるか一時途絶えてしまえば、包囲網を構成している部隊は混乱し、孤立した各友軍艦隊での各個撃破や指揮系統の回復後、組織的な反撃が可能になるだろう。

では、最初のミッシヨンの説明をする。画像を見てくれ。この画像は、友軍部隊の情報による、最も新しい作戦区域の状況だ。この戦線に配備された敵侵攻部隊は、駆逐艦・軽巡洋艦を中心にした部隊だ。砲撃は大したことはないだろうが、魚雷での一発が怖い相手だ、注意しろ。

相手は初期段階での奇襲では打撃を加えられたかもしれないが、この状態であれば今の我々でも十分に相手はできるだろう。今のうちに実戦に慣れてもらいたい。

戦線後方への侵入路を確保するために、このエリアに存在する敵をすべて排除しろ。

以上だ。もう一度、聞いておきたいことはあるか？」

これは楽しい事になりそうだ……と、プリンツ・オイゲンは直感的に感じていた。

そして、第一艦隊は進軍を始める。

『まさか敵襲?! 早い! 来たぞ!』

『敵の戦力がよく判らない。三方から取り囲むぞ! 第一、第三艦隊は後方から仕掛けてくれ』

『了解した!』

「ふうん、これだけ? つまらないわね」

通信で聞こえてくるこちらの突然の反攻に焦る水雷戦隊を他所に始まった初の戦闘は、思いの外余裕をもった撃破に成功していた。

敵部隊には艦船がないようで、全部量産型の軽巡洋艦や駆逐艦、PTボートの類であつた。

予め発艦準備を済ませていた、エンタープライズとイラストリアスが二方向の敵を艦載機で蹂躪し、僅かなうち漏らしたは410mm連装砲を装備したアリゾナが掃討した。

残りの真正面はプリンツ・オイゲン達の前衛艦隊が開幕の魚雷で致命的なダメージを

与え、砲戦で残りもまたたく間に平らげてしまったのだ。

「まさか、ここまでは。」

もしかして指揮官は、私の背負う遺志を共に担ってくれる人なのか……」

「フフフ……これなら戦艦だつて鎧袖一触だわ……」

指揮官の指示に従い発艦させたエンタープライズと雷撃を担当したプリンツ・オイゲンは指揮官の技量の高さの舌を巻いた。自分たちの指揮官は単なる一介の内政屋だと両者共に思っていたのだが、それはとんだ思い違いだということが思わぬ形で露呈した。

『前衛部隊との連絡が途絶えました』

『どういう事だ?』

『詳細は判りませんが……』

ほんの数分の中に3つの小艦隊が全滅させられたようです』

「……エンタープライズ様、ポイント8Hに電探の感あり。どうやら新手のようです」

敵の通信を傍受したベルファストが険しい顔で伝える。いま現時点では指揮権はエンタープライズにある。判断を仰ぐためにこの情報を伝えるのは当たり前のことだ

あった。

「なんだと!? 指揮官に判断を仰ごう」

「悠長にそんな事してんじゃないわよ。何のために指揮官はあなたに現場での指揮を委任したのよ」

面食らい、取り乱すエンタープライズを見て、呆れたプリンツ・オイゲンは彼女に釘を挿すことにする。

「いい? 戦艦にしては電探の感が鈍いわ。それに反応の動きからすると精々30kt前半ってトコロ。」

それによ場所的には戦艦の主砲の射程範囲内に収まっているはず……推測が正しければこいつは量産型重巡よ。

周りが一気にヤラれてるのを見つけて、思わず焦って単艦でのこのこ出てきたって感じだわ」

どうする? と半ば挑発するようにプリンツ・オイゲンはエンタープライズに言い放つ。

「ぬう、確かに……筋が通ってるな。よし! 叩こよう。」

無視したとしても退路を塞がれる形になるのは良くない」

「りよーかい。フフつやればデキるじゃない」

第一艦隊は意気揚々とこの哀れな残党を狩るべく、進軍を開始した。



「……で？ 実際の所どうなのよ？ エンタープライズ？」

昼食後、訓練で偶々エンタープライズと遭遇したプリンツ・オイゲンは早速、噂の真偽を確かめるべく本人に直接聞いてみた。あれだけ母港で話題になつてる事だ。気にならない訳は無かった。

（まあ、あの真面目な指揮官がそうあっさり受けるとは思えないけど）

あまりに暇なのか艦装の龍や蛇の首の様ような主砲と鷲が遊び始める。鷲は艦装の頭の上に乗ったり、口の中に入ったり、嘴でコツンコツンとつついていた。

「ん？ なんの話だ？」

しかし、当の渦中の人物はなんのことはなく、プリンツ・オイゲンの質問に対して要領を得ていない様子であった。

「はあ、あんたってホント鈍いわねえ。」

あんたが指揮官に求婚を迫つたつて話、もう母港中で話題になつてたわよ」

訓練や職務についてはそこまで鈍くはない筈だが、それ以外においては感覚やアンテ

ナの感度に乏しいエンタープライズに対して、内心呆れつつも、きちんと彼女に事の説明をした。

「なるほど、もうそんなに話が広がってたのか?」

「何がなるほどよ、古参組から聞かれなかったの?」

話が広がるのが予測してなかったのか、意外と言った風な反応を見せるエンタープライズに対して、プリント・オイゲンはごくごく当たり前な疑問をぶつける。

新参組は恐れ多く聞けなくとも、少なくとも黎明期から指揮官を支えてきた古参組は物申したいはずだからだ。

少し前に大本営が発表した「誓いの指輪」を用いた絆を構築して艦船を強化する「ケツコン」システムが導入された際は皆、気が気でない様子であった事をプリント・オイゲンは覚えている。

あのメイドとして矜持を高く持つベルファストでさえ、そのシステムを初めて知った際には思わず視線を外していた事は彼女の記憶に新しい。

プリント・オイゲンの見立てとしては、ケツコンシステムア・レを契機にして指揮官に好意的な艦船が動くだろうとは考えてはいたが、まさか堅物生真面目なエンタープライズが一番槍を持つこととなるのは流石に面食らった。

「ああ、あの時執務室にはベルファストやブルツクリン、ヘレナがいた時に言ったから

な。

それにヨークタウンホーネット姉と妹にも相談したしな」

ああ、そうか。そういうことだったのか……と合点がいった彼女は思わず大空を仰ぎ見、目頭を押さえた。

それなら確かに、ユニオンやロイヤル中心に噂が急速に広がる事は無理もない話である。

よりによつて古参達の前で言い放つとは恐ろしい女だと、同性ながらプリンツ・オイゲンは畏怖した。

特にベルファストはマズい。プリンツ・オイゲンもエンタープライズも最古参と言つてもいいぐらいの時期から当母港に在籍していたが、ベルファストは中でも一番初めに在籍していた艦船である。

まだはつきりとした業務が定まっておらず、問題が山積みであった頃、今みたいにそれぞれ艦船が業務を代行するほどの戦力も規模もない頃に秘書艦として指揮官と共に業務の遂行のあたっていたのが彼女である。

ロイヤルの誇る武勳艦でありながら、自らをメイドとして振る舞う変わり者ではあるが、今に至るまでの母港を指揮官と共に作り上げた本物であり、指揮官の秘書艦という役職を離れたあともメイド長として、指揮官の側近を務める彼女にはプリンツ・オイゲ

ン、エンタープライズ兩名ともにある種の畏怖を持っていた。

「あんたよく生きて帰って来れたわね……で、戦果はどうだったの？」

プリンツ・オイゲンの脳裏には能面のように感情の失われた顔で艤装の155mm三連装主砲を展開させ、両手に投げナイフの容量で魚雷を構える彼女の様子が容易に想像できた。

「幸運艦だからな。結果としては指揮官には断られたよ。それで諦めるつもりは私は無い。

ようやく見つけた私と共に歩んでくれるかもしれない人なんだ。あの人がいるなら地獄の底までついていく所存だ」

「まあ、妥当なところね」

【あの】指揮官の事だ。見誤った行動はしないだろうし、古参組のいる手前、要らぬ気を使ったのだろうかということは用意に想像できた。

ふと、プリンツ・オイゲンはエンタープライズの左手に視線がいった。薬指には見たことのない銀灰色のアクセサリーが鈍く輝いていた。

「エンタープライズ、それ……」

「ああ、これか？ 【誓いの指輪】だ。結局の所、お互いに妥協点を探ったら、コレに落ち着いた。

これで私はあの人の物になったのだと自覚することができるし、他所の指揮官達にもあの品のない視線で見られることも少なくなつた。

「コレはコレで悪くないが……」

プリンツ・オイゲンは後頭部を殴られたような感覚に陥つた。

「プリンツ。貴女だって、指揮官の事を愛しているのではないのか？」

「いつも業務の合間合間を縫つて、指揮官の所に遊びに行つてるじゃないか」

「否定はしない」

「他方の戦闘報告書を閲覧する時はいつも執務室で読んでいたな。」

それに、この間指揮官がソファでうつかり座つたまま仮眠していた時に指揮官の膝枕

を堪能していた。

「ずるいぞ」

「なんでそんな事知つてるのよ!」

思わず口調が激しく、早口になる。

艦装の首がぐくと揺れ、左右の主砲を交互に跳んで渡つて遊んでいた鷲はエンター

プライズの所に飛んで戻つていった。

確かにそうだ。プリンツ・オイゲンは指揮官に対しては非常に高い好感を持っている。

だが、それが本気になつてゐるかがわからないのだ。元は軍艦だった身、人と変わらぬ身になつてからは感覚や感情がわからないときもある。

だからこそ見定めたい。本気になるかどうかを……



はじめての実戦が無事にケリを付けることができた後、母港に帰還したプリンツ・オイゲンには真つ先に執務室に向かつていた。

その足取りは大きく、荒いものであり、艤装すら外しておらず、傍目には相当不機嫌だということが容易にわかるだろう。

「指揮官、入るわよ」

指揮官の返事を待つことなく、扉を開いて中に入る。

執務机で書類をまとめ、忙しく事務作業に勤しむ指揮官がいた。書類の他にも机の片隅や応接間の机には写真が散乱しており、応接間の机にある地図にはペンやマーカー等で細かな書き込みがなされており、そして模擬演習用の自軍と敵軍の駒が置かれていた。

「来るだろうとは思っていた。今は部屋が散らかつていて申し訳ないが、そこに掛けな

やう」

言われるがまま応接間のソファに座ったプリンツ・オイゲンの眼の前にある写真と模擬演習用の小物が押しつけられ、簡易的なスペースが出来上がる。

その上に報告書と思われる。紙束と、マグカップに入ったコーヒーが差し出される。「言いたいことはあるだろうが、コレを見てからにしてほしい。コレに私の言いたいことが入っている」

そう言うと、指揮官は対面のソファに座る。サイドテーブルに紅茶の入ったマグカップを置いていた。

そして、先ほどと同じようにテーブルを整地して、スペースを確保した後、事務所類を展開させた。

彼女が書類を読み、納得するまではここに居座るつもりらしい。しかし、業務も手放したくは無いからここで作業も進める。

(忙しいのに律儀な事……)

意図を察したプリンツ・オイゲンが眉間に皺を寄せて報告書を読み込んでいる中、ふと指揮官は艦装の砲塔と目が合う。

左右あるうちの片割れは、とその首(?)を伸ばしてじろりと指揮官を見つめた。相方はペンを走らせている右手の甲に、と顔(?)をよせる。寧猛な肉食の海洋生

物をモチーフとしたような凶悪なシルエットとは裏腹に艤装の砲塔は指揮官の頬にすり寄る。

「？」

困惑する指揮官をよそに砲塔の片割れも右手の甲に砲塔下部を乗つけた。指揮官にとつてはプリンツ・オイゲンの表情を砲塔によつて読めないのはよろしくないので、渋々と左手で優しく頬にすり寄る艤装の砲塔を押しつける。その後、艤装は察したのか下向きに俯く、まるで拒絶されたことを悲しむように。

その様子を見た指揮官は仕方がないといった様子で左手を砲塔に伸ばして、側面をそつと撫でる。

どの道抗議に來た彼女が納得して戻らねば執務は進まず、さらには右手は彼女の艤装に占領されているとは進めることは困難であつた。

個人的にも指揮官は、この鉄血陣營艦隊特有の艤装に興味を持っており、彼女の裁定待ちにおける時間潰しにはもつてこいの手慰みでもあつた。

(見つけた、私を従わせるのにふさわしい人が……)

今までの艦隊運用で持つても十二分に膨らんだ期待ではあつたが、今回の件で完全に確信に至る。

(この人の元でなら……私は本氣になれる……！)

報告書の中身としてはやはりと言うか殿部隊に多数の被害を出したと言う内容であった。

継戦を無視した弾薬投射とPTボートの体当たり戦術により主力と前衛部隊双方に被害。加えて、放棄した物資にブービートラップを仕掛けたり、消費した弾薬や応急修理装置を回収しようと接近した部隊に対して待ち伏せによる奇襲を敢行。先の戦術と合わせてさらに被害が拡大した……との、経緯が記されている。

ちらりと指揮官をみる。艦装は本人の深層心理を垣間見えると研究畑で囁かれているらしい噂を聞いてはいたが、思いのほかこの指揮官に対する熱の入れようが凄いと彼女は思った。

指揮官の反応も拒絶ではなく、興味津々に、しかし繊細に艦装を触っているのも自分達艦船に対する親しみと愛情が伝わってきそうであり、プリンツ・オイゲンにとっても心地よい気分浸れた。



例えば、その辺りから指揮官に対して挑発的な言動をし始めた。

「なあんだ。もうなつてたのね」

指揮官に対して好意を持つている艦船は少なくは無い。特に古参組はその傾向が顕著だ。

——もし、その娘達の想いの籠が外れたとするならば……？

きつと毎日がドタバタとして、もつと愉しくなるだろう。

ついでに同郷のお堅い艦船達にとつてもいい刺激にはなる。彼女たちも指揮官に悪い物は持つてはいない。

鉄血に先を越されたとなると、ロイヤルも黙つてはいまい。そうやって規模が大きくなるに連れて重桜の艦船達もやがて動き始めるだろう。

「エンタープライズ。確か、二隻目以降の「誓いの指輪」って」

「ああ、どうも書類を書く必要があるらしい、確か「ケツコン屈」だとか」

これから自分が引き起こすであろう出来事は容易に想像することができるだろう。最古参勢の動きにあの澄まし顔したメイド長もどんな顔をするだろうか……

だが、不思議とそう悪い結果にはならないだろうと、プリンツ・オイゲンは期待に胸を膨らませていた。

3 : ベルファストは譲れない

「ご主人様、おはようございます。」

本日はこのベルファストが、秘書艦を務めさせていただきます」

朝と言うには少し暗い時刻、執務室に入った指揮官を迎えたのはロイヤルの軽巡洋艦、ベルファストである。

ステレオタイプのメイド服を身につけてはいるが。れっきとした艦船。激動の第二次世界大戦を戦い抜き、生き残った猛者である。

指揮官はよろしくと言って、今日も一日が始まる。

「では、本日のご予定を復唱させていただきます」

そう言うにつらつらと予定を喋りだす。

ベルファストはリマインダーのメモ用紙をめくる。

「他には本日は鉄血艦の面談がございます。」

メンバーはティルピッツ、シャルンホルスト姉妹、ローンです」

指揮官が了承すると、紅茶の支度をそそくさと始める。

「ご主人様、本日はこちらの茶葉になります。」

おすすめはお砂糖を少なめに、ミルクを多めに入れるのがよろしいのですが……
お砂糖とミルクの加減は如何がなさいますでしょうか？」

指揮官は自分好みの量をベルファストに伝え、事務仕事を始める。毎回こんなやり取りをしている理由として、単純に指揮官の好奇心のままに調整を決めるからである。

ベルファストは慣れた手付きで紅茶を淹れ、指揮官の邪魔にならず、紅茶を飲むには適切な位置にティーカップを置いた。

指揮官は時折、ベルファストを呼んで書類の裁定に必要な書類を言うと、彼女は書齋スペースからさつと必要な書類を取り出す。

紙束の擦れる音と波音しか流れない静かな空間、普段はメイド長として、部屋の保全部や母港の巡回を行っているが、秘書艦でしか味わえないこの空間は、ベルファストにとってかけがえのないものである。

まるで、この世界には自分と指揮官の二人しかいないような気がして、その時の感覚が心地よいからだ。

しかし、うつすらと水平線に薄明がかかり始めた頃、執務室のドアが開かれる。

「おはよう、指揮官。今日はいい天気だ、悔いの無い良い一日にしよう。」

せつかくだから一緒に朝ごはんを食べないか？」

エンタープライズであった。

窓から降り注ぐ薄明の光が、ちょうど左手に差し掛かり、誓いの指輪が鈍く光る。

指揮官に求婚した後、断られたものの、その後の話し合いにより、妥協案から誓いの指輪の装備に至った彼女だが、指揮官の事は諦めていない。むしろ自分の気持ちにより素直になり、こうやって積極的に指揮官に関わるようになった。

「今日はスクランブルエッグにレタスとミックスビーンズのサラダだ。オレンジジュースもつくぞ！」

嬉しそうに指揮官に朝食のメニューを言っではにかむエンタープライズ。

指揮官も書類仕事が忙しいわけではないのでそれを無為にするはずもなく、椅子から立ち上がる。

「ご主人様、問題ありません。書類の精査を行っておきますので、どうぞごゆるりと」
済まない、指揮官は言う、と紅茶をぐいと飲み、美味しかったと一言告げる。

「さあ、行こう！ 妹と姉が場所を確保してくれてる」
そのまま、エンタープライズは嬉しそうに指揮官の腕を取りすたすたと執務室から出ていく。

——ベルファストは指揮官のメイドである。メイドは従僕であり、指輪など言語道断ベルファストはメイドとしての高い矜持を持つが、それ故に悩んでいた。

——ですが、ご主人様がもし、私に指輪を差し出して頂けたなら……

——メイドが指輪など貰うべきではない、肅々とお使えしてこそメイドでは？

エンタープライズが指揮官から誓いの指輪を貰って以降、急速に広がるケツコン届。既に指揮官に出した艦船もいれば、出す覚悟が中々出ず、自室の棚に眠らせる者もあり、また新参組では興味が無いのでこれをスルーしたり様々な反応を見せている。

ベルファストは前述の通りの理由にてケツコン届すら取らず、日々悶々とした気持ちで過ごしていた。

「……お掃除いたしましよ」

煩惱を振り払うように書類を戻した後、掃除道具をとりだし、執務室の掃除を始めた。「……あら、プリンツ・オイゲンではありませんか。ご主人様は朝食で外出中ですよ」机を拭き、ホコリを取り除き、部屋の換気を行い。しばらくして執務室の一角、部屋の掃除をしていたベルファストの元にプリンツ・オイゲンがやってきた。

「しまった……いいわ、ここで待つ」

そう言うと、応接室の長ソファに寝転び、寛ぎ始める。

うーんと背伸びをする際、伸びた指先に誓いの指輪があるのをベルファストは捉えた。

「オイゲン、それは……」

「【誓いの指輪】よケツコン届、出したから貰ったわ」

ベルファストの反応とは異なり、プリンツ・オイゲンはにべもなく応える。

「何よベルファスト。あんな指揮官、もう絶対に逢えないわ。なら捕まえに行っても構わないでしょ」

「確かに、そうですが」

「古参組はみんなケツコン屈、持ってるらしいわ。」

大本営にどれだけの誓いの指輪があるかはわからないけど、そのうち無くなるかも」
いたずらっぽく笑いながら、左手に収まった誓いの指輪を眺める。

「私やエンタープライズがここまで指揮官に本気になってるのに、貴女はそうじゃないなんて言わせないわよ。」

……どうせロイヤル特有の矜持やら何やらでビビってるだけだと思っけど」

まるで、心を読むかのようにベルファストの心情を言うプリンツ・オイゲンに、さすがのベルファストも焦る。

確かにそうだと内心応える中、彼女は指揮官との思い出が蘇ってきた……



はじめは奇襲攻撃からの反撃にて、敵侵攻部隊への中枢に進軍するために、包囲網の一角を突破し、侵入路を確保するための戦いを制した時でのことだった。

「ご主人様、エリア内の敵勢力を殲滅しました」

『確認した。どうやら損害も無いようだ。そのまま次のミッションへと移る。』

だが勘違いするなよ！ 貴様らの“おもちゃ”には多くの資源リソースがかかっている。

これくらいの結果が出るのは当然だ!!』

ベルファストは衝撃を受けた。

平時にはあんなに穏やかな人間がこうも厳しく変わることができるのかと……

次の叱責の場面は、急遽始めることになってしまった初陣が終わった時である。

「指揮官、作戦終了した。これより帰投する」

『確認した、そのまま帰還せよ。敵侵攻部隊の足止めは無事成功だ。』

しかしこれ位でいい気になるな！ 貴様ら程度の艦船は腐るほどいる！ 気を引き

締めておけ』

あまりの迫力にエンタープライズはひい！ と上ずった声を発した。

これは演習の場合も同様で……

『相手部隊の撃破を確認した。』

今回の演習ではかろうじて勝利を収めることが出来たが、その運がいつまでも続くと思うな。

気を抜けば即地獄行きだということを忘れるな!』

と、その評価は独特なものであった。

ただ、それは嫌味という種類ではなくて、勝利に酔いしれる艦船達への慢心を防ぐためにかなりの太い釘を刺し、浮かれた思考を現実へと性急に戻らせた。

もちろん、作戦中ミススを犯してしまい撤退しようものなら……

『エンタープライズ！ 貴様らは遊びに来ているのか？ 今回のような失敗は2度と許さん。』

再出撃までに頭を冷やしておけ!!』

『無駄飯食いを雇っている余裕は無い。赤城、もう一度チャンスをやろ。考えて行動しろ!!』

『その無様な姿はなんだ!! ベルファスト!』

私は敵を喜ばせるためにお前たちを寄越しているわけではない。その事を肝に銘じておけ!』

このようにレパートリーに溢れる言葉で叱責された。質の悪い事に、ただの撤退ではなく、油断や慢心からのミスを瞬時に見抜き、ピンポイントで叱責するものだから、艦船達の間では恐怖の象徴として恐れられている。

平時の気のいい指揮官とは言葉通りまるで別人であった。

しかし、古参達は知っている。

作戦が最も重要な、成否を問うような分水嶺に至った時、そんなここぞと言う時に限って指揮官は激励の言葉をかける。

『さあ、ここがアガリのマスだ！ ガツンとカタをつけて、母港ウチに帰ろう！』

ブリーフィングでも余り私情を挟まず、厳しい指揮官が見せる人間臭さには、不思議と引き寄せられる魅力があった。

元々、ベルファストと指揮官との邂逅は初期艦である綾波とロングアイランドを除けば最速である。指揮官が戦力の増強の為に始めて建造を行なった。その時の艦船がベルファストであった。

以降、事務仕事が得意ではない2人にならわって、指揮官の秘書艦としてベルファストは母港の運営を支えていた。

まず、指揮官としての最初の内政は施設の拡張であった。

指揮官は真つ先に寮の改築に取り掛かり、次に海軍食堂と売店の拡張、そしてドックや倉庫の拡張へと立て続けに行われた。

次に、各陣営の艦船を呼び出し、ヒアリングやメンターを行うことによつて、規律や規定、環境の調整を行った。当然、東煌や北連、アイリスなどの陣営が加入するにつれ、彼女たちも対象となる。

プリンツ・オイゲンが鉄血代表、エンタープライズがユニオン代表、重桜代表として

は重巡洋艦・高雄が担当しベルファストはロイヤル代表として、指揮官との面談に臨んだ。

居住環境はどうか？ 待遇はや支給品はどうか？ 訓練と委託業務のバランスはどうか？ 他陣営との接触はあるのか？ 内容は多岐にわたる。

通常業務に加えて、このような業務を行っていれば、施設の拡張など遅々として進まないと思われたが、ベルファストの予想に反して不気味なほど早く進み、いづれも十分な余裕を持てるくらいには拡張が完了していた。

思わず方法を指揮官に聞いては見たものの、『戦争屋畑ではないからな。これくらいが精一杯だ』と応えただけである。寮の拡張やドックの拡張には特殊な手続きが必要で一般的には進まないはずだが、指揮官は魔法でも使ったように認可をもぎ取り続けた。

そんな母港が今のような規模になるまでの長い間、指揮官の思考と人柄に触れ続けた艦船だからこそ、ベルファストは指揮官の叱責に隠された意味を推察する事ができた。

『貴様らの装備には高い金をかけている云々』は作戦が上手く行き過ぎて指摘点は無いが、それによって艦船が浮かれないようにするための方便であり、『貴様ら程度の艦船は腐るほどいる云々』ではまだ戦闘は続いている為、油断せずに進軍せよという意味合いを含めている。

これらの言葉の裏の意味を理解できた時、ベルファストの中で平時の穏やかで優しい

指揮官と作戦時の苛烈な発言を繰り返す指揮官の像が一致した。

艦船達も愚かではない、きちんと説明をすれば納得するだろうに何故説明しないのか？ ベルファストは指揮官に戦闘時の命令について苦言を呈するものの、指揮官は『貴様には関係のないことだ』の一点張りで応える気は無く、そこからベルファストと指揮官の押し問答が始まる。

「ご主人様、貴方様の艦隊運営の手腕は非常に高く評価いたします。それ故に、作戦時のその態度に疑問を持ってしまいます。

「お応え下さい……何故なのかを……？」

ついには155mm三連装主砲を向けるまでに憤りを露わにしたベルファストに対して指揮官は……

「……無駄か」

ふう、とため息をつき。指揮官は話し始める。

「貴様にはわからないことだが、『セイレーン』の出現とレッドアクシズとの分裂で状況は大きく変わっている。

主に未知でありながら、驚くほどの可能性を持つ『キューブ』を巡っての水面下の争いだ。今、各陣営は如何に『キューブ』や『セイレーン』のもつ技術を早く吸収し、我が物にできるかで皆目の色を変えている。そして、目的を果たすためにつとより早い手

段は戦争だ。

——君たちが殺し合わなければならぬ

戦争が大きくなればなるほど人類は生き残るために、技術を加速させるだろう。そうすれば国は富み、より強固な繁栄が約束されると妄信しているからだ。それは何も軍人や政治家だけの話ではない。

その技術に関わる民間企業や、恩恵を受ける一般人も同様である。自分が大きな利益さえ得られることができるならば——人の心に弱さがあるのなら。所詮、民主主義国家やシビリアンコントロールの完全なる実現など、気弱なモラリスト達が作り上げた虚構でしかない。

ユニオンにもロイヤルにも、戦争とそれによる技術の革新を求めている奴等がいる。もちろん、重桜や鉄血にもだ。戦争は商売と研究の道具、意味なんてどうでもいい、ただそれを呼び込む戦いがあることを望んでいる。

始まりさえすれば、手伝うだけだ。セイレーンやレッドアクシズを叩く戦いに乗っかってな。

だからこそ、我々はここにいます。ユニオンやロイヤルも、この機会に自身の影響圏をさらに拡大、ないし盤石なものするつもりだろう。

——君たちは戦うしかない。その役割は、そのために用意されたものだからな。

ならば、打てる手は全て打つべきだろう。そんなくだらない理由で再びこの世に戻ってきた君たちを踏みにじるわけにはいかないだろう。私の腕に抱えられるまでならな」
指揮官のそんな真意を聞いた時、ベルファストはこの不器用でどうしようもない指揮官に仕えようと心に決めたのだ。



時間は流れ、夜になる。

指揮官が戻ってきてても、時折エンタープライズやプリンツ・オイゲンが執務室に顔を出し、指揮官とのやり取りを楽しんでいた。

ベルファストはそれを眺め、見守る。しかし、内心では羨望の目で二人を見ていた。

「……これで終わりにしよう。残りは明日だ」

印鑑を押し、書類をまとめた指揮官がベルファストに提案する。

すつかり夜も更けて、月明かりが程よく明るい。時間的にも、艦船の皆は寝静まつてもおかしくない程であろう。

「ご主人様、お疲れ様でした。後は私が片付けますので、先にお戻りなられてはいかがでしょうか？」

パチリと部屋の電気を消して、そう言うベルファストを他所に指揮官は机からリングケースを持ち出す。

ベルファストははて？ どうしたものと思索を巡らせる。誓いの指輪は初回以降はケツコン届を大本営に出さなければ現物はもらえない筈だ。

「君には長いこと世話になっている。感謝している。」

しかし、これからも戦いは続いていく、敵はますます強く、戦術も巧妙になるだろう。だからこそ、打てる手は打っておきたいと言うのが本音だ。歯の浮くような台詞、というのも上手く言えないクチでな……率直に言えば、この指輪でその能力を更に高めてもらいたいと思っている。

……メイド長の君には申し訳ないが、これからも母港のエースとして、よろしく頼みたい。

これは私の独り善がりだが、受け取って欲しい」

そう言って指揮官がリングケースを取り出し、誓いの指輪を差し出す。

パカリ、と開かれて鈍色に輝くリングをみたベルファストは思わず感極まり、口元を右手でさつと隠した。

そして、恐る恐る左手を差し出す。

——拒絶されたらどうしようか……？ いや、そもそも指輪をはめてほしいという意

思表示をわかってくれるのか……

まさか指揮官自らがこういつた赴くとは夢にも思わず、期待と不安、歓びと驚愕が入り混じり考えが纏まらない。

そんな事をベルファストは思っていたとは露にも知らない指揮官は、彼女の意図をきちんと汲み取り、リングケースから取り出した指輪をスツ、とはめ込む。

左手で包み込むように彼女の手を持ち、おっかなびつくりながらも初めてにしては上出来な位に左手の薬指に誓いの指輪をはめ込んだ

嗚呼、ああ、とベルファストの心は歡喜に満ち溢れていた。目尻からはうつすらも涙も見え、耳も赤くなる。

「……ご主人様にそんな事を言われましたは私、もつともつとご奉仕したくなります。これからも、未永くよろしくお願い致します」

——難攻不落のベルファストが堕ちた

この事実は多くの艦船達に衝撃をもたらし、彼女たちの指揮官へのアタックが露骨になることを指揮官はこの時は知る由もなかった。

「…………もうダメ！わたくしもう抑えられません！」

感激するベルファスト。その普段見られない押し寄せる感情の濁流に涙を流す様子を見た指揮官は彼女を一人にして気分を落ち着かせようと気を利かせて執務室を出た。

そして、足音が遠のき、完全にいなくなったその時、ベルファストは豹変する。

息を大きく荒げ、自らを抱きしめてべたんと女の子座りの体勢で座り込んだ。

「これからも、ご主人様にお尽くし致す所存です。

付きまとうだけのエンタープライズ様やプリンツ・オイゲン様のように愛玩動物で妥協するつもりはありません」

そして彼女は体勢を変え、心情を思い切りぶちまける。

「この身朽ち果てるまで貴方様に尽くしとうございます。身の上では元々は民間人の身、戦争が終われば、軍属を離れる事もありえましょう。ですが、この関係は決して変わることはありません。

ご主人様の伴侶は是非私めにお任せください。ご主人様を不幸にするような女であれば排除し、見合う女であれば誠意をもって応援いたします。もちろん、結婚式も最高のものを提供できるよう善処いたします。ご子息・ご令嬢がお生まれになった際には、お忙しい奥方様の代わりにお世話もいたします。だって、ご主人様の血が半分流れてますもの、こんなにも愛おしい物はありませんわ。ですが、女の方は監視させていただきませぬ、ご主人様に対して不貞でも起こさう物なら、即刻排除も辞さない覚悟です。

軍属から離れての民間への就業は大変だとお聞きします、ですが私もお力添えさせていただきます。このご時世、ハラスメントが横行しているとお聞きしております。上司や政敵の弱みを握るのもお任せください。下郎共にご主人様だけのこの身は汚させませんが、叩いてのホコリ掃除にはメイドとしての自信があります。ですので、

「ご主人様には円満な出世への街道に乗っていただき、幸福な家庭を築いて頂けましたら、当然それは私の至上の喜びになります。」

「……ですが、指揮官も人の身、いずれ朽ち果てる時は来るでしょう。私は艦船ですから当然ご主人様の最期は見届けます。そして、やるべきことを終わらせませぬ。見送る準備は私が全身全霊を持つて全て、お世話させていただきませぬ。こればかりは、他の女にはお触りなど絶対にさせませぬ。もちろん同性であつてもですが……」

見送つた後も終わりではありません、ご主人様の墓標を毎日お掃除致しますし、彼がやるべきだつた事はベルファストがやり遂げてみせませぬ。ご主人様の成したかつたお仕事をごなし、子供がおりましたら一人立ちさせて、ご主人様のご両親も御健在でおありでしたらご面倒も致します。そうやつて全てを終わらせた後にご主人様のお墓の前で、後ろめたい気持ちもなく逢えることができるのです。

その時はこのメイドに一言、お褒めの言葉をかけて下されば、ベルファストはそれで十二分に幸せでございます……」

月明かりの執務室の中、まるで修道女の用に跪き、誓いの指輪を持ちながら祈りを捧げ、一人固く誓いの言葉を呟いた……

短編（オムニバス形式）

1

「指揮官様、今日はこの赤城が、秘書艦を勤めますわー」

九つに別れた尾がゆらゆらと揺れながら、重桜の航空母艦・赤城がリマインダーのメモを読み上げる。

その左手には誓いの指輪がはめられており、ケツコン届済みであることがわかる。

「以上が今日の予定ですわ。」

今日は指揮官様と一緒……イツシヨ……」

そうやって指揮官が付き合っている執務机の隣に併設されてある秘書艦用の机に座り、作業を始める。

この一航戦・赤城が着任した当初は、『他の女の匂いが……！』や他の艦船に対して『あら？ 指揮官様の近くに害虫が……』と不穏当な発言をしていたものの、現在ではなりを潜めている。

当初、指揮官はこの癖の強い航空母艦に手を焼いたものであった。

「赤城、聞きたいことがあるのだが……」

「あら？　本報告書と週報で食い違いがありませんわね？」

「これの作成者は……ズイカクですわね。指揮官様、私が確認致します」

「ああ、構わないが……」

「あんまり無茶苦茶はするなよ？」

執務の途中、報告書と途中の週報で食い違いがあったこと以外は何事もなく作業が進んだ。

過去の話ではあるが一時期、あまりに自艦隊の友軍にちよつかいや直接行動を示唆する発言をしていたためか、他の母港に引き渡そうかと悩んでいた位にはこの指揮官も相当に苦労したことが伺われる。

楽しそうに同じ重桜の航空母艦である瑞鶴に対してどのようにイジろうかと考えてる赤城に釘を刺すのはそのためであった。

『指揮官様アア！　この赤城！　この時を待ち望んでいましたわアアアア』

エンタープライズに誓いの指輪を渡した後、彼女の進言を聞き入れて作成、公布したケツコン届を片手に嬉々とした表情を浮かべて執務室に押しかけてきた時には思わず身構えてしまうほどであった。

「指揮官、姉さま。お茶を淹れて来たぞ」

しばらくして、がちやりと扉を開けて入ってきたのは赤城の相方である加賀であつ

た。

お盆の上には三人分の茶菓子とお茶が載っており、ここに居座る意思がヒシヒシと感じられる。

「指揮官様、ちようどよい頃合いですわ。

少しばかりお休みいたしましよ？」

「……そうだな。せつかく淹れてくれたお茶を冷ますわけにもいかない」

赤城はグイと背伸びをした後、応接間の机に置かれたお茶を甘味を堪能すべく立ち上がる。

九つの尾も長いこと椅子に座っていたせい、ピンと逆立てるように伸びをした後、ゆらゆらと揺れていた。

「まだキリが良いところでは無いのか？ ならば、こうしてやろう」

指揮官も立ち上がるもの、目の前の書きかけの書類に目が泳いでしまう。別に直ぐに作るものでも無いが、どうせなら終わらせてのんびりしたい、というのも指揮官の本意ではある。

そんな指揮官の様子を察した加賀は、彼の両肩に手を伸ばし軽く押さえて立ち上がるのを阻止した。

「茶菓子は多めに用意してある。故に少し行儀が悪いが、食わせてやろう。」

お茶を飲みたければ冷ましてやるぞ」

指揮官の分のお茶と菓子に載ったお盆を持ちながら、片手にもった菓子楊枝で器用に羊羹を切り分け、そのまま一切れを突き刺して指揮官に差し出す。

せつかくの好意を無為にするわけにもいかず、また羊羹ぐらいならば机を汚すこともないだろうと判断した指揮官はそのまま加賀の要望通りに口を開けた。

「ふふつ、素直な奴は私は好きだぞ」

「加あー賀アー?」

満足そうに微笑む加賀を尻目に指揮官を挟むように赤城が詰め寄る。

尾の毛も逆立ち、興奮を隠しきれない様子であった。

「姉さまは真面目すぎるのだ。」

それに指揮官は私の物でもあるのだから、世話をするのは主として当然、違うか?」

目を細めて淡々と語る加賀に対して、ぐぬぬと睨みつける赤城。

指揮官はいつものじやれ合いと判断して、黙々と仕事をキリの良い所まで片付ける。

「大体加賀はずるいですわ! 私がやりたかった事をいともたやすく」

「ならやればいいだろう姉さま? やったところで指揮官が迷惑を被るわけでもないだろ」

「ろ」

「そんなこと……やっちゃってしまつては我慢出来ないじゃないですか」

「確かに、指揮官を食べようものなら、高雄が黙ってはいないだろうな」

やいのやいのと騒ぎ立てる赤城と加賀。こうなってしまうては中々止まらない。

軽くコラ、と戒めるのもいいが、できればそういう方向は控えたい指揮官はふと加賀の持つてきたお盆が目に入った。

重桜で使われる木製の漆を塗り重ねてできたそれは黒光っており、そこにお皿と羊羹、加賀が使っていた菓子楊枝がある。

この菓子楊枝も樹脂等の安物ではなく、クロモジと呼ばれる樹皮に芳香がある落葉低木を削り出して作られた逸品であり、お茶が入っている湯呑も重桜で用いられる茶器のものであった。

これらは母港内での環境改善の一環として、各陣営の馴染みのあるものを調達できるように指揮官が取り計らったものである。寮の内装から始まり衣類、食事、家具はもちろん、こういった小物まで調達できるように指揮官は動いていた。

指揮官は菓子楊枝を一切れの羊羹突き刺し……

「あむ……し、指揮官様!?!」

「仕事は終わった。のんびりしようか」

「ふっ、これでこそ強者よ……」

赤城の口へと入れ、間髪入れずに席を立って、すたすた応接机に備え付けられたソ

フアに座った。

それを見た加賀は満足気な顔で、赤城はカア、と赤面しながら応接ソファに座る。

勿論、指揮官の両脇に一航戦は座り、お茶を飲む。

加賀が持つてきた時よりも時間が立つたせいか、ややゆるくなっている。

黙々とお茶と菓子と菓子を堪能する指揮官。一方、加賀は指揮官を気にすることなくお茶を啜り、赤城は指揮官の動きの一つ一つをじいといと見つめている。

指輪を渡して以降、赤城の指揮官に対する好意は膨らむ一方であつた。状況が許すなら、同じ好意を持つた相手に対して情が深い愛宕のように指揮官を押し倒してしまいたい位に、また同じく指揮官に好意を持つている艦船に対しては重巡洋艦のローンのように嫉妬してしまいたい程、それが例え妹の加賀であつてもそうだと云えた。

「赤城、尻尾を抑えてくれないか？ 地肌当たつてむず痒い」

首をさすりながら指揮官は困り顔で赤城を見る。

ソファの構造上の問題や、九つの尾ということではいつの間にか毛先が指揮官の肌に対して刺激を与えていたようだ。

——ふと、疑問に思う。

艦船の技術は各陣営に特徴がある。

特にわかりやすいのが鉄血と重桜だ。

鉄血にはその運用思想や要求される性能の都合により、生物的な艦装が出来上がっており、重桜は艦装こそごく一般的な艦船に近いと思われるが、身体的特徴に何らかの要素、有り体に言えば獣の耳や尾等が付加されることが多い。

前に閲覧した資料では本当に体の一部らしく艦装を装備していない時でもそのままであり、器官としても機能するらしい。

——触ってみたい。

純粹に好奇心がむくむくと心の中で起き上がっていくのがわかる。

鉄血では昔、プリンツ・オイゲンの艦装がすり寄って来たのを好奇心からか触ったことはあったが、今にして思えば、中々の肝が座っていたと思う。

艦装が向くということは、砲口を向けられるという事。

本来は早急に射線から退避するべき案件であり、きつく注意を促さなければならぬ。
い。

だが、時系列的には初の実戦の後、散らばった情報をあらゆる手を使って取り、頭を振り絞つての指揮を行った後であり、思考能力を欠いていなければあはならなかっただろう。

「指揮官様？ どこを見ているのですか？」

ちらちら見える尾を無意識のうちに目で追っていたのだろう。不審に思った赤城が

指揮官を見つめる。

「尻尾を見ていた」

蛇に睨まれたような視線を浴びながら、指揮官は素直にそう答えた。

加賀がピクリと狐耳を動かし、機会を伺う用に指揮官を見つめる。

「あらあ、指揮官様はこの【赤城】の尾に興味が？ 嬉しいですわあ」

わざわざ主張する赤城に対して指揮官の背中越しに見つめる加賀の目が鋭くなる。

「そうか、指揮官はこういうのに興味があるのか。好奇心を持つことは悪くはない」

加賀がそう言うのと指揮官の膝の上に九尾を載せた。

「重桜の角や尾は実際の動物と同じく神経や感覚を有している。

故にいたずらに触ることを良しとしないが、今回は許そう」

「加賀？ 指揮官様は赤城のを触りたいのですよ」

加賀の九尾に重なるように赤城の尾が膝の上に置かれる。

「さあ指揮官様、どうぞ存分にこの赤城を愛でてくださいいな」

指揮官は赤城の茶色がかった黒い九尾の一つを手に取りまじまじと見つめる。

狐の尻尾は触つたことのない指揮官ではあるが、思いの外毛の量が多い事がわかる。

手触りとしては表層のチクチクとした刺毛と地肌付近のふわふわとした下毛の2種

類あることがわかった。

おそらく本来の動物と同じく、泥や水は表面で弾きつつ、柔らかな下毛は保温のための断熱層として機能するらしい。

また、十二分に手入れをしてるのであるろう、毛艶もよくすべすべとした感触と下毛の包み込むような感触が心地よい。

「あつ……」

「触り方がまずかったか？」

「指揮官、姉さまは十分だろう？ 次は私だ。」

強者には私の九尾を触る権利がある」

小さく声をあげる赤城を他所に、グイグイと寄せてくる加賀の九尾も弄ぶ。

こうなってしまうのは二人が共に納得するまでは素直に自身の好奇心のままに動いてしまっても構わないだろう。

加賀の九尾も毛をかき分けつつ、観察する。すると意外なことが判明した。

加賀の九尾も赤城と同じ毛質なのだが、ふわふわとした下毛が赤城の物よりも多い。

尾の毛の中に指を突っ込んで見ると、みるみる内に指の周りが暖かくなり、優れた保温性を持つことが容易にわかった。

「……んっ、どうだ？ 鉄血の鉄塊よりも良いだろう？」

わずかに頬を紅色させながら、誇らしげに加賀は言った。

「指揮官様。赤城ももーっとお願ひ申します」

赤城の声に応えるように指揮官は両手で赤城と加賀、それぞれの尾を愛でていく。撫でたり、ぎゅつと握ったり、毛をかき分けて地肌を触ったりとすることに、赤城と加賀は声を漏らし、狐耳をピクピクを動かす。

その反応と触り心地で指揮官は気分良く二人の九尾を存分に弄んだ。

「ああつ、指揮官様の指が中に……っ！」

「んんっ、私でスツキリできるなら、思う存分この躰を使うと良い」

指揮官の予想と異なり、この二人にとっては尾への刺激はかなりの物であるようで、漏らす程度に抑えられていた声も今では嬌声混じりの色っぽい物へと変わる。

流石にやり過ぎたかと指揮官が思い、その手をやめようとした時であった。

「バタン！」と執務室の扉が開き、何者かが執務室に押しかけてきた。

「指揮官殿！ 大丈夫か？」

白い軍服を身につけた黒髪のポニーテールの艦船がその犯人である。

彼女は指揮官の姿を見、外傷のない様子にほっと一安心した。

「高雄か」

「指揮官殿、新入りの鍛錬が終わって報告に戻ろうとした時、一航戦の嬌声が聞こえた物だからってつきり辛抱堪らず指揮官殿を襲ったのかと……」

高雄は指揮官の両側にいる一航戦を瞥見した。

両者ともに息が荒くぐったりと指揮官に背を向けている。その九尾はぐったりと指揮官の膝の上に置かれていた。

「一航戦……は大丈夫じゃなさそうだな」

「こ、腰が抜けました……この赤城、不覚です……」

「私も姉さまと同じだ。櫛で梳くのと変わらぬと思っていたが、これはこれで」

「しかし指揮官殿はその様子では大丈夫そうだな。」

全く、ローンの時と言いそなたは怖いもの知らずだな……」

指揮官は照れくさそうに俯いて後頭部を搔く。

高雄とは付き合いが長い。プリンツ・オイゲンやエンタープライズと同期であり、第

2艦隊の前衛をよく務めていた彼女は指揮官の事をよく理解していた。

「拙者、この指輪に誓って指揮官殿の懐刀となり、共に征くとは言ったが……」

指揮官自らわざわざ危険を侵す必要はなからう……」

左手の指輪が鈍く光る。

彼女もまたケツコン届を出した艦船であり、指揮官の警護を自ら買って出た者であった。——もつとも、その理由としては彼女と妹の愛宕に指揮官が誓いの指輪を渡した時、

辛抱堪らず愛宕が指揮官を押し倒し、事に至ろうとしたのを阻止した事ではあるのだが……

「で、事態は大方予測できるが、指揮官殿は何をしたんだ？」

「尻尾を触った」

ダウンした赤城と加賀を応接ソファに寝かせ、執務机に着いた指揮官に対して、高雄が報告書を渡す。

「好奇心か」

「まあ、そうなるな」

「この分では一航戦は使い物にならないだろう。残りは拙者が秘書艦として務めを果たそう」

ペラペラと報告書に目を通す指揮官を他所に、高雄は秘書艦用の机に座る。

普段は執務室の前で警守している事が多い為、執務室に居るのはそこそこレアである。

「高雄」

「何だ？ 指揮官殿」

眼の前にの応接ソファにはダウンした一航戦が寝ている。

尻尾を揺らしながら、体力を回復させる気で居るらしい。

指揮官は机の盆に置かれた菓子楊枝を見る。

「あの菓子楊枝、高雄が削り出したと聞いた。

使いやすくて、良かったよ。ありがとう」

「ちよつとした鍛錬のようなものだ。あれでも気分転換にはなる故」

そつけなく応える高雄ではあるが、頭にある獣の垂れ耳がピクピクと前後に動いており、内心では喜んでいようであつた……

2

「はい指揮官、あーんして」

ある昼下がり、応接机でローンがお弁当のおかずを指揮官に差し出す。

今日の秘書艦はローンが担当しており、昼食を取りに食堂に向かおうとした時に、ローンに呼び止められた。

『指揮官。今日は私、お弁当を作ってみました。いかがでしょうか?』

指揮官が断る理由もなく、その場に居た、ベルファストと高雄にはそのまま食堂に行ってもらい、本日はそのまま執務室での昼食になった。

「指揮官、お味の方はどうでしょう?」

「ああ、美味しい」

「よかったあ」

指揮官の言葉にばあ、と笑みを浮かべ嬉しそうにするローン。

今この場には指揮官とローンの2人しかおらず、他の艦船達は出払っており、二人きりのランチタイムとなっていた。昼食時のローンは指揮官の隣に陣取り、楽しそうに指揮官の様子を眺めている。

「ごちそうさま、ありがとう。ローン」

「フフツ、お粗末さまでした。」

「一服、如何ですか？」

朝食が終わり、お弁当箱を片付けたローンは自分のカバンから缶を取り出し蓋を開ける。

「どうやら中身は紙巻きたばこであり、ぎつしり詰まった中から器用に一本を取り出して指揮官に差し出した。」

「職業柄、タバコも嗜む必要があった指揮官は拒否するそれを理由もなく受け取る。」

「はい、どうぞ。すぐコーヒーをお持ちしますね」

指揮官が口に咥えた所で、ローンは懐からイムコライターを取り出し、ずいと指揮官に肩と肩が触れ合うような距離まで近づき、指揮官が動くまでもなく火をタバコに近づける。

その後、部屋の片隅においてあるコーヒーマーカーからコーヒを持ってくる。

指揮官はゆつくりと息を吸い、タバコの火が燃えすぎないようにそつと息を吐き出す。

タバコの香りの他にもウイスキーらしいほんのりとした風味を指揮官は感じた。

「はい、コーヒですよ。タバコ、わかっちゃいました？ 良いウイスキーがあったん

「で、ブレンドしたんです」

「へえ、どこのタバコなんだい？」

「手作りです。今は昔と違って、色んな物がありますね」

2つのコーヒーカーップにコーヒートを注ぐローン。

彼女がここに来て、すこしばかり大変なこともあったが、今ではこの母港に欠かせない存在にもなってきた。

「しかし、まさか私がこんな事をするなんて思っても見なかったです。

戦場で敵を切り裂き、命を刈り取る事も好きですけど、他にもっと充実感を得られるなんて……」

「そう言ってもらえると、引き止めた甲斐があつてよかったよ」

指揮官がそう言うと、ローンは肩を寄せて指揮官にくっついた。

「確かに指揮官の言つた通りでした。ただ戦場で殺すだけなら機械にだって出来ますし、感情なんて必要ありません。

自らで考え、感情を持ち、色んな物に興味を持つからこそ……創造し、より満足した充実感を得られる……それが生命

今では指揮官のそばにいますと私、戦場で本能の赴くままに殺し、切り裂いて、灰燼に帰し、踏み躪るそれらよりも充実感を感じるんです」

指揮官の言葉の端々にも現れてはいたが、開発直後はローン自身の独特な価値観に手を焼いていた。

赤城や加賀の例もあり、何らかの改善をする必要があった。指揮官個人の思惑としては、艦船少女達に内心でどう思われていようと構わない。が、それが戦闘時のパフォーマンスにまで影響してしまつてはたまつたものでない。

指揮官に与えられた役割は、彼女たちを使い、作戦を遂行させる。それが役割であるが故にだ。

人の理を超えた彼女たちの存在に対して、信用と信頼を得ることはたやすいことではない。

勿論、同じ同業者の指揮官や大本営等、別の軍の管轄に対しても言えることなのだが……。そこには見える努力も見えない苦労も多分に含まれている。

相手が感情のない完全なAIでも無い限り、如何に過酷で荒んだ環境であっても、時間をかけて地道に整えていけば、やがては自分にとって居心地の良いものへと変容させることができる。

指揮官はそういった事を理解し、実行できる程度には学を修めていた。

「指揮官、実は私指揮官に謝らなければならない事があるんです」

「? どういう事だ」

一本目タバコが短くなり、灰皿に置いた指揮官に対して、流れるようにローンは追加のタバコを差し出す。

そのまま吸口を唾えると、さっと火をつけ、紫煙を吐きだす。

ローンはそのまま指揮官の腕をとり、そっと抱きしめた。

「実は私、建造途中であつてもある程度は意識がありました。開発中私の元に足繁く通う指揮官のお話を聞いているんです。だから指揮官のあの態度には私も心動く物があつたのです。今まで黙っていて、ごめんなさいね」



「開発ドック？」

指揮官の疑問に工作艦明石は元気良く答えた

「そうにや！ 諸事情によつて建造されなかつた子を現代へと蘇らせる。それが開発ドックにや」

指揮官は明石の熱弁を聞きながら、カタログを見る。

個人的には、鉄血のヒンデンブルグやロイヤルのライオンみたいな艦が気になったが、現時点ではカタログに載つておらず、少しばかり残念であつた。

「それで、指揮官はどの艦を選ぶのにや？」

「ん、カタログスペックを見る限りはどれも魅力的だなあ」

「むむむ、早く決めてくれないと他の指揮官に出遅れるよ」

夕張に急かされるも指揮官は顎に手を当て思案するばかり。このままでは当分決まらないだろうと明石と夕張が思ったその時であった。

「指揮官？ 何見てるの？」

プリンツ・オイゲンが指揮官が見ていた開発感のカタログスペックを取り上げる。

「ふーん……指揮官、私この娘が良いわ」

暫くそれを読んだ後、指揮官にあるページを見せた。

「鉄血の重巡洋艦、ローンか」

「そう。指揮官、見た感じ誰かを選ぶのに悩んでたようだし、どうせ急かされてサイコロで決めるくらいなら私が決めるわ」

「ぬう……そう言われては仕方がない、じゃあそれにしよう。

明石、夕張。これから忙しくなるだろうが、よろしく頼むよ」

——それから数日後、母港の工廠に開発ドックが新造され、ローンの研究と開発が始まった。

「指揮官、ここが開発ドック。」

突貫工事で作ったばかりだから散らかってるけどごめんね」

夕張に連れられた指揮官が案内されたのは新設された開発ドックに指揮官が足を踏み入れる。

中は見たことがない機材で埋め尽くされており、電源ケーブルや配管が壁や天井付近に張り巡らされていた。

LEDに照らされた中、人が入れそうな容器の前に明石がいた。

「指揮官、待っていたにや」

「これが開発ドックか？」

「そうにや、開発に必要な項目はコレにまとめておいたにや」

明石は指揮官にバインダーを手渡す、バインダーには必要な物資と戦闘データ等が書かれていた。

「そうか、キューブ及び資金は構わん。倉庫から出せ、改造図も今持っている位なら問題ないな。全部持つていくといい。」

所で、戦闘データとは……？」

「早い話、巡洋艦で戦闘を行ってほしいのにや。記録機材はこつちで用意しておくから

思う存分暴れてきてほしいのにや」

「なら、ケーニヒスベルク級と、ドイッチュラント級、アドミラル・ヒツパー級を使うとしよう。彼女たちには私が説明しておく」

「それはありがたいにや。収集データによつてかかる時間は左右されるけど、頑張つて見るにや」

「ああ。そつちも苦勞をかけるが、開発を頼む」

——次の日

明石が戦闘データを入力していた頃だ。

開発ドツクの扉が開く。明石ははて？と疑問に思った。夕張は先程外出したばかり、忘れ物でもしたのかと明石は考えた。

「明石か。濟まんが邪魔をする」

中に入ってきたのは意外な事に指揮官であった。

指揮官は地面に這われたケーブルを跨ぎながら、ローンが入っているであろう容器の前に立った。

「進捗の方はどうだ？」

「指揮官が戦闘データ以外の物資を全部使わせてくれたおかげで肉体はバツチリにや。

多分眠つてる状態にや」

後は艤装の構成と調整くらいにや」

指揮官はそうか、と返してじっと容器を見る。

「指揮官？ 流石に容器は透けさせたら強度の問題があるから姿はまだ見れないにや」

「ああ、そうだな……」

明石の言葉に指揮官は同意するも、翌日にはまた開発ドックの様子を見に行く指揮官が目撃された。

「杞憂であるのはわかってはいるが……」

明石も夕張もない開発ドックの中、指揮官は思わず一人呟く

「あるツテを使って、君の事は調べさせてもらった。いい話も、悪い話も。」

だが、私は方針を変えん、このまま早急に建造する。今から貴様は私の指揮下に入る。今後は前衛部隊の一員として行動して貰う事になるだろう、覚悟しておけ。」

この次の日も指揮官は様子を見に行き、だれもない開発ドックの中で、母港の状況や運用方針を淡々とつぶやく。まるで目の前のローンに言い聞かせるように。

指揮官本人としては、早めのコミュニケーションのつもりであり、あるいはシミュレーション代わりではあったが、幸か不幸かその言葉はそのままそっくり彼女に聞かれてたとは、思ってもいなかった。

「そうか。開発ドックはそのような感じになっていたのか」

「はい、指揮官はサン・ルイの後にもモナークを建造途中だとお聞きしております。

その時またまには開発ドックに足を踏み入れてあげては如何ですか？」

「わかった。ありがとう」

指揮官は時計を見る。今日は明日の大本営での会議があるので、昼から母港を発たないといけなかった。

吸いかけのタバコを灰皿に置き、立ち上がる。

「あら、もうこんな時間。お昼休みの内に早くここから出発しないといけませんね。

私、見送りたいです。いいでしょうか？」

「ああ、かまわないよ」

指揮官は出張用のカバンを取りに執務机へ、ローンは指揮官の上着を取りに棚に向かう。

「まだこの季節は外は暑いでしょうから、上着はお持ちしますね」

「わかった。ありがとう」

母港内の滑走路の搬入口付近でブルックリンが待っている筈だ」

二人は執務室を出て、滑走路に向かった。

滑走路と言っても別に何のことはない、小規模の管制塔の無い簡素な物である。

今は大本営から遣わされた小型機がぼつんと待機しており、指揮官が搭乗次第、いつでも発進できる態勢でいた。

「すまん、待たせたか？」

「いいえ、問題ありません」

ブルツクリンの姿を見つけると、指揮官は足早に彼女の元に向かう。

彼女の左手には誓いの指輪が嵌められており、ローンにとってはそれが不愉快であった。

少しばかりの打ち合わせを彼女と行い、問題がなかったのか指揮官は再びローンの元に戻った。

「はい」

「申し訳ないな、ここまで見送って貰って」

ローンにから上着を受け取った指揮官に対して、ニコリと彼女は笑みを浮かべた
「秘書艦も中途半端な時間に終わらせてしまった」

「大丈夫です、指揮官。コレは仕方ないことですから。」

「お仕事、頑張ってくださいね」

ローンが手を振る中、大本営での会議の為に指揮官はブルックリンと共に飛行機に乗り、母港を出る。

扉が閉じ、見えなくなろうとした頃、ローンは静かに呟いた……

「こういうのって……許せないよね」



会議が終わり、帰路につく指揮官とブルックリン。

会議の内容としてはこちらが軽んじられる事も無く、程々だと指揮官は思う。他の母港の人間とも有意義な話をする事も出来たし、個人的にはここ数日の母港を空けての遠征は成功だとも言えた。

隣には席にはすやすやを寝息を立てるブルックリンが居る。人手の都合上、慣れない人の世界に彼女を連れ出して負担をかけてしまった事には少しばかり申し訳ないが、彼女はこの遠征で大きく役立ってくれた。

「ブルックリン、そろそろ母港に着く。起きておきなさい」

自分の母港が指揮官の視界に入ってきた。

彼はブルックリンの方を掴み、軽く揺さぶる。

「ん……指揮官、すみません」

本人も寝ていたことに気づいておらず、意識が戻った時にはハツとした表情を浮かべている。

「かまわないよ」

がくんと小型機が滑走路に着陸し、ぐんぐんと速度が落ちる。

窓からは指揮官の帰りを待っていたのか、艦船達が今か今かと待ち構えているのが見えた。

演習や委託から帰ったばかりであるのか、艦装を展開したまま者も見受けられる。

「じゃあ、帰ろうか。みんなが待つてるみたいだ」

エアステアを降ろしてもらい、指揮官は機外に出る。

「指揮官！ おかえりなさい！」

他の艦船よりも早く指揮官の下へ走る者が一人、パタパタと艦装を着けたまま走るローンに対して、指揮官は笑顔でこれを受け入れる。

後ろの艦装も指揮官を見つめたまま、指揮官に近づきじいと見つめ、指揮官の持つているブリーフケースを啜えて器用に頭の上に置いた。

「わたし、なんとかして帰ってきた指揮官を癒やしたくて……だから、その……」

ハグ、していいですか？」

普段から時折、委託から帰投してきた駆逐艦に対して労いを込めてハグする事があつた彼女だが、まさか自分もされるとは思つて見なかつたようで、指揮官は驚いた表情をみせた。

が、それも束の間、指揮官は笑みを浮かべて、両腕を広げて受け入れる体勢のローンへ身体を預けた。

「ただいま、ローン」

「おかえりなさい、指揮官」

がっちりと腕を指揮官の背中に回し、指揮官の言葉に応えるローン。深く抱きしめ合う形で指揮官は彼女の表情は見えなかつたが、その声色からはとても嬉しそうだと感じた。

——しかし、実際はそうではない

(ああ、わたし……指揮官を独り占めしてる！ 他の娘がわたしに嫉妬してる……ああっ！)

ローンと指揮官の行動に驚愕を見せる艦船達に対して、彼女は勝ち誇つた笑みで彼女達を見ていた。

彼女の蛇のような艦装は砲口を向けて、もしも邪魔立てするならば容赦はしないと云つた様子で威嚇している。

古参勢の嫉妬からくる視線を浴びて、彼女は萎縮するどころか、高揚とした感覚を得ていた。

「指揮官、お願いしてもいいですか？」

火に油を注ぐべく、甘えるような声で指揮官に話しかける。

「どうした？」

「私もギュツとして欲しいです。それで頭も撫でて欲しいです」

「ええと……これでいいのか？」

指揮官は腕を彼女の背中と後頭部に回す。その動きは少しばかりぎこちないものの、彼女の頭を撫でる。

「はい、ありがとうございます」

さらに増す嫉妬の視線を浴び、満足そうにしてローンは視線を向ける。

その視線の先には一段と嫉妬を帯びた視線を向ける艦船がいた。

(……許せない！ あのカエル女、この前、指揮官が優しいからって抱きついてた)

殺意すら籠もった視線を向けるサン・ルイに対し、ローンは満足した表情を浮かべ、指揮官を開放したのであった。

3

「ブルックリン、着任しました。よろしくおねがいします」

「ああ、よろしく頼む。」

率直に言えば、この母港も立ち上がったばかりで、何もかも足りない状態だ。

何かと不便や苦勞を掛けると思うが、よろしく頼む」

無事に大本營からの支援として艦船と物資が届いたことに内心で安堵しながら、指揮官は応えた。

指揮官に与えられた権限は艦船少女達を指揮する他にも、支援物資・艦船の要請が行える。

この指揮官の母港となる基地はまだ立ち上がったばかりで、資金や建造を行うための物資が心もとなく、やむを得ず支援要請を活用した。

ただ、これらの支援要請は無制限に行える筈もなく、大本營と指揮官との間に置いて、勲章という仮想通貨を用いた取引が必要になる。

「ではこの書類を確認してください。以上の品目で間違いないでしょうか？」

ブルックリンは支援要請についてこの母港に送り届けられた物資の詳細が書かれた

書類を指揮官に渡す。

品目については各種設計図をメインとしており、他にも強化・改修パーツや食料も記載されている。

ブルツクリン自身もその品目であり、支援要請に従って、この指揮官のもとに着任する形となった。

(私の命令はこの母港での業務……そして、指揮官の調査。

民間からの特殊な事情により戦時徴用された彼はその情報の割にあまりにも不可解な点が多すぎる。

指揮官に隠された内情を暴いて、我々に対する脅威を消し去らねば……)

支援要請に従って着任する際に、大本営の上層部より直接の命令書が彼女に渡されていた。

曰く、彼は民間からの戦時徴用での着任であるが、不審な点が多数見受けられた。

例えば、着任から間を置かず艦船専用の寮舎やドックを大きく改築したこと、これは拡張させる為にダイヤとコインを言う擬似的な通貨を必要とするはずだが、改築するために時間をかけて集める必要があり、この指揮官はあまりにもそのスピードが早すぎるという点。

次に、艦隊の拡充度の度合が挙げられる。

立ちがって間もない母港ではあるが委託や任務をこなすのは必要なことである。勿論この指揮官も規定に従い仕事を行っているが、委託艦隊や任務の遂行速度と艦隊の拡充速度が釣り合わないという疑惑がある。

「ああ、問題ない。支援要請に応えたことに感謝する」

（そして、勲章の数もこの基地の活動に対して釣り合っていない……）

指揮官、貴方は一体何モノなのか？ 無能か有能か確かめると共に、その化けの皮を剥がさなくては……）

ぐつと右の拳を握りしめ、ブルツクリンは使命に燃えていた。

その時、ブルツクリンの視界がぐるんと揺れて、暗転する。

本人がそれを自覚する間もなく、場面はビデオテープを早送りするかのように移り変わった。

ブルツクリンの着任後しばらく経ってから行われた、新規に着任した指揮官のお披露目も兼ねた観艦式と航海演習。それに参加できるのは新任指揮官やベテラン問わず、上層部によつて選別された優秀な指揮官である。上層部擁する大本営に選ばれた彼らは、期待と共に出世への街道が開かれたと言つても過言ではなかった。

——指揮官が無能か有能か判明する機会は意外なことに早く訪れた。

「指揮官、ヘレナから連絡が来ました。無事に当母港の艦隊は観艦式会場となる海域に

到着したようです」

「そうか、各艦に持ち場につくように、それと装備も故障や異常がないか再度確認を取らせろ」

「了解しました」

指揮官はブルックリンにそう指示を出して執務室での作業を続けた。

（無能では無いものの、観艦式に選別されるほど優秀でもない……：現実には味気の無いもののだ）

上層部直々に警戒されるとなると、当初はこの指揮官は余程の怪物なのか……と憂慮していたが、事実とは異なる結果に内心で落胆するブルックリン。

指揮官は上層部の望みに適った人材でないと選別され、観艦式には招待されず、母港にて執務を執り行っていた。

しかし、場の賑やかし程度に観艦式を行う海域への出撃命令は届いており、艦隊を送り込んでいる。

指揮官は黙々と情報端末と書類に視線を行き来させる中、秘書艦としてブルックリンもその補助にあたっていた。

（しかし、この指揮官が行っている行為についてはある程度の考察は完成しつつある。

内政型の人間であるが、どう考えても彼の背後には民間が立っているとは思えない）

ブルックリンはこの指揮官の調査を進めると共に様々ことがわかってきた。

そのうちの一つはこの母港に入ってくる物資の量。軍の支援物資や必要な軍需物資の他にも民間から注文された民需品が軍用輸送機から多数送り込まれている。

民間からの品物は嗜好品や喫食として食料の他にも、それぞれの陣営に合わせた食器・生活雑貨が存在している。軍需物資の注文も民間からの購入も軍資金を使うことは出来るものの、嗜好品や生活雑貨等の明らかな私物品となりうるものに関しては規制が引かれている。

しかし、この指揮官は規定内に存在する機密費の制度を上手く使うことでこれらの物資を多く購入している事がわかってきた。

(機密費は確かに指揮官の権限なら使う事もできるし、購入物品や物資の購入も具体的な情報は隠せる。だからこそ実際の運用と書類の運用には差異が出来るのはわかる。

しかし、その額があまりにも多い。指揮官は一体どのようなコネクションを活用したのだ?)

秘書艦をする中でわかっている事実としては、指揮官宛に送られてくるメールの中に、時折どこから送られてくるか一切わからない物が存在している事が判明している。それが一種の手がかりになるかとブルックリンは考察するものの、それを手中に収める機会の中々無かった。

(そして委託。これは盲点であった)

次にこの母港での委託業務の内容についての詳細が判明していた。

細かな書類の中に埋もれてはいたが、この母港での委託について、平時では科学研究・自主訓練・戦術課程・資材整理・対抗演習・貨物輸送を行い、緊急時に要請された委託では要人護衛と休暇護衛を行っていることがわかった。

(どれも時間はかかるものの、報酬にダイヤや艦船を強化するために必要な経験が効率よく稼げる……)

「どうやらこの指揮官はそういった情報部署や護衛を行うための外交部署にいる人間から優先的にこれらの委託を調達している」

この指揮官は明らかに民間人ではなく、軍の人間……分類として分けるなら、恐らくは軍政官僚型の人材であり、かなり機密性の高いセクションに所属していたであろう人間である事は彼女が考察した結論上ではそう確定していた。

「ん？ 電報……？ 指揮官！」

突如、電報が飛び込む。読み込んだ内容は観艦式が何者かによって襲撃を受けたことであつた。

「なんだ？ どうした？」

「大変です！ 観艦式が襲撃されました！」

「そうか、とうとう来たか……ッ！」

ブルックリン！ その棚、C—7にある海域図を出してくれ！」

突如舞い込んだ凶報に対して、指揮官はうろたえるどころかブルックリンに海域図を取らせる。

幸か不幸か突然の出来事にブルックリンは焦った所作か、指揮官の指示を出す前に呟いた言葉を聞いていなかった。ブルックリンは書類や資料から収める棚から海域図を引つ張り出し、指揮官は情報端末を用いて、大判プリンターを起動させ、透明なフィルムを用いて印刷する。

「持つてきました！」

「応接机に置いてくれ。艦隊に連絡はかけられるか？」

ブルックリンは半ば投げ込むように海域図を応接机に置いて、艦隊指揮用に執務室に設備として設置された通信端末で艦隊に連絡を試みる。指揮官はまずはじめにシートを応接机に敷き、その後海域図を応接机に広げ、その上に大判プリンターから印刷されたフィルムを敷く。フィルムには基盤の目状に線が引かれており、色んな場所に点が打たれていた。その点は形が2種類あった。

「指揮官！ 連絡、繋がりません！」

「広域帯のコールに切り替えろ」

指揮官は箱から兵棋演習で用いるような赤と青の軍隊符号を持ち出すと、フィルムのポイントに対応した軍隊符号を置いた。

「ふむ、初期位置はこの辺か……」

そう呟くと、おもむろにブルックリンのいる通信端末に向かう。

「どうだ？」

「まだ繋がりませんか!？」

「辛抱強くコールをかけ続けるんだ、いいな?」

「はい!」

未だに出撃した艦隊に繋がらず、焦るブルックリンを宥めながら、指揮官は通信設備の別の端末を使う。

「この時刻なら、あの辺にいるはずだ……」

おもむろに指揮官は懐から携帯型の情報端末を出して通信端末に繋げる。

そして、周波数やチャンネルを確認して、通信を試みた。ある人物にかけられたコールはいともたやすく繋がら

、指揮官は自分の所属を階級、そして名前を申告した。

「やあ、どうもどうも。お元気そうで」

開幕早々に会話の主導権を握るために皮肉を飛ばす指揮官を他所に、隣りにいるブ

ルックリンは誰に連絡をつなげたのか気になり耳をすませるものの、辛うじて聞こえるのは女性の声だけである。

「今、貴女相手とはいえ遊んでいる暇はない。」

今から現地にいる私の艦隊が包囲網と護衛艦隊の一角を突破、後方へ浸透し、指揮系統を叩く。

貴女には私では出来ないことを2つやってもらいたい。

1つは現地にいる他の指揮官と連携して反撃の準備に取り掛かってもらいたいことと。

もう1つはすぐ隣で救援要請を出しているであろう元帥達上層部に追撃戦で必要になる機動部隊の要請を出してもらおう事だ」

相手の反応であろう声に、渋い表情をして口角を歪めながら話を聞く指揮官。

「できるだろう。先の戦争で勝利に導いたユニオンの大英雄である老将軍。」

その人の孫である貴女の声になら、元帥殿も無碍には出来ないはずだ。

難儀な生まれの貴女には同情はするが、私は勝つためにわざわざ手札を見せてまでお願いをしているのだ。

その配慮をムダにしないで欲しいものだ」

そう言い捨てると、指揮官は通信を切る。思わずブルックリンは熱のこもった視線で

指揮官をみた。

——なるほど、私の考察に間違いはなかった。

この指揮官はコレを見越して、母港に留まっていたのだ。

無能有能どころではない、正真正銘の化け物だ……

——もし、こんな人の下で外交官として力をふるえるのならば……

そう思慮した直後、ブルックリンのコールに感が入る。

「指揮官！　ヘレナに繋がりました！」

「よしー」

指揮官は携帯型の情報端末で、システムを起動させた。

応接机に初めに敷かれたシートが発光し、ホログラムを出現させる。

ある青い軍隊符号の近くに、ヘレナを始めとした指揮官の艦隊が表示される。他の青い軍隊符号にはそれぞれ友軍が、各指揮官の秘書艦にしている艦船のホログラムが浮かび上がる。

続いて、赤い軍隊符号にはデフォルメされた各種艦船が表示される。

「ヘレナが変わってくれ、これから忙しくなるぞ……」

そう指揮官が言うのと、それに合わせてブルックリンの視界が揺れる。

しばしの暗転の後、舞台はいつもの執務室に戻った。

「……明晰夢？」

ここに来て初めて、今自分は夢であると自覚しながらも、夢を見ている事に気づく。しかも過去について夢だと……

となれば、ブルックリンは直ぐにカレンダーをみた。

(あつた、この日は……指輪を貰った日)

「ブルックリン、今日は急に呼び出して済まない」

直後、ブルックリンが振り向くと、いつもの執務机に指揮官が座っていた。

「私になんのご用件でしょうか？ 本日は演習でのご用事あつて動けない指揮官の代理として私が艦隊を率いて赴くはずですが？」

ブルックリンは無意識に言葉を紡いでいた。この言葉は過去で言った言葉と寸分違わず同じものであつた。

「ああ、そうだ。少し頼みがあつてな」

指揮官は執務机から何かを取り出して立ち上がると、ブルックリンの側に近寄つた。

その手にはリングケースが掴まれており、彼女の目の前に立つと指揮官は片膝を着いてリングケースを開ける。

「近いうち、大本営に会議に行くこととなつた。ブルックリン、艦隊の外交官として、君の力を借りたい。

向こうでは指輪の無い艦船に対して引き抜きを行う等、あまり良い噂を聞かないが、色んな指揮官とその秘書艦に接触できる。君にはその情報収集を任せたいと思つてる。

勿論、嫌ならそれでも構わないし、ここより待遇が良い基地や指揮官に仕官したいと思ふなら……行つて貰つても構わない。

が……私は、君にここに居て欲しいと思つている。

……だから、もし君が良ければ、これを^{誓いの指輪}受け取つて欲しい。」

——とんだ不意打ちであつた。

既に過去、起こつた事であつても、何の因果か夢で再びこの場面に遭つたブルックリンではあるが、やはりと言うか……わかつていても思わず面食らつてしまう。

わざわざケツコン屈を出さないと指輪を用意しない指揮官が、自分の為だけに用意する。そこまでして自分を欲しているとわかる、それがたまらなくブルックリンには嬉しいことであつた。

「……わかりました、よろこんでお受けいたします」

ブルックリンはそんな指揮官の言葉に対して、拒否する理由など無かつた。



「ん……夢か」

うしろ髪惹かれるような、郷愁に駆られるような感覚から昔の夢を見ていたとおぼろげながら覚えていた。

「懐かしい」

母港を支援するための物資・人員として、そして大本営に指揮官の情報を送るためにこの母港に派遣された頃にはこんな事になるとは思ってもいなかった。

「指揮官にはより多くの利益を……より強大な権力を握って欲しい」

指輪を見つめそう呟いた後、自室の作業机に目をやる。そこには書類の紙束がまとめられており、指揮官に探りを入れたり、正規・不正規を問わず機密を守るよう指示された命令書や他所の母港の艦船から得た不正行為の証拠となる書類が置かれていた。

指揮官に先日指輪を貰ったことで、これらの書類を渡す決心がついたのだ。

これらの行為は完全に大本営の意向に背く形であり、指揮官側につくという意思表示でもある。

「私……指揮官専用の外交官にも、秘書にもなりたい」

おそらく向こうも彼女の出自からある程度は察してはいるだろう。

しかし、これらの手土産を見てどういった反応を示すのか？ 指揮官はどのような表

情を見せるのか気になってしまふ彼女であつた。
「だから……交渉をはじめよう、指揮官」

4

「本日の演習、ご苦労だった」

報告書を持ち、内容に目を通した指揮官は満足そうに頷く。

ページと閉じて、執務机に報告書を置くと、その視線の先には重桜の戦艦、三笠とブルックリンが居た。

「うむ、今回は無事。勝利を収めたぞ」

「私は当たり前のことをしただけです。三笠さんがいたからこそです」

彼女はそのカンレキから、重桜の他にも、ロイヤルやユニオンの艦船にも一目置かれていた。

「特に問題もなかったか？」

今回の演習は、指揮官不在の中ブルックリンが代理で指揮を執った。三笠は演習艦隊の旗艦として他の艦船の管理を行い。無事に演習を終わらせた、と報告書には記載されている。

「特に今回は相手の要望もあったが試験的にローン、サン・ルイ、そしてモナークの計3隻の開発艦を投入している。」

報告書ベースで話す内容ではないが、何かしらの出来事が無かったかと少し、心配していたんだ」

そう話す指揮官に対して、ブルックリンと三笠は特に無いと答えた。

(個人的には今回の相手は実に気に入らない。指揮官を侮辱するなど、決して……)

内心で今回の演習相手についてブルックリンは呟き……

(指揮官との階級差を理由に権力を笠に着て、我らの艦隊を丸ごと引き抜こうなど……
言語道断)

三笠は当時の事を回想し、内心で怒りに震えていた。

「ぬう、何も無いのなら、私から言えることは無いな……」

一抹の不安を抱えながらも、現地からの声では何もないという言葉信じ、今回は引き下がる指揮官。

人間の軍隊とは隔離されているものやはり軍事組織、指揮官のような民間から転向した、いわゆる外様扱いの人間には色々としがらみがあった。着任して当初は同期は他にしても、軍属上がりの指揮官や大本営にはあまり良い顔をされていないというのが現実であった。

今でこそ、一番の出世頭の同期が立ち上げた、大艦隊の副司令官の肩書と、その同期の計らいによりある程度の階級を持つてはいるが、やはり厳しい立場であった。

「やはり貴方には威厳という物が必要なのでは、指揮官」

そう言つてティーカップを差し出すのは、本日の秘書艦であるプリンス・オブ・ウエルズだ。

「私は三笠達と同じく、貴方を認めているし、貴方の側に居たいと思つている。

だが艦船達が認めていても、他の指揮官達に侮られては……正直な所、腹に据えかねる物がある。

確かに、電撃的な強襲・浸透で補給線や指揮系統叩いての援護や、あるいは別戦線への揺さぶりをかけたり、突破された防衛線の火消しも大変に重要だ。

だが、艦隊決戦で華々しく戦果をあげて、誰の目にも明らかな実力を示すべきではないか？」

キツ、と目を細めて指揮官に意見を述べる彼女であるが、指揮官としても悩ましい問題ではあつた。

「そうだぞ、やはり武勇において、かの大海戦のような状況で大勝利を収めてこそ……」

元が軍属でないことは承知ではあるが、その能力を謙遜と遠慮で曇らすには……」

コクコクとプリンス・オブ・ウエールズと三笠の言葉に同意するかのように首を縦にふる、ブルックリンを他所に。さて、どう言いくるめるかと指揮官は思案したその時、大艦隊から連絡が無い込んでくる。

「はい……何?! わかりました、指揮官に伝えます」

「どうした?」

連絡を受け取ったプリンス・オブ・ウェールズが驚愕の表情を浮かべる。

内容は、母港から少し離れた領海近くにおいてレッドアクシズの艦隊が出現、敵は小規模ながらも領海に侵入し、その管轄の守備隊と交戦中につき、急ぎ応援に向かえというものであった。

そして、連絡の送り主は大艦隊の司令官からであり【緊急の案件】だということがわかった。

「ぬう、我らが言った側から……」

「とはいえ、最初の戦闘でこういった部分に関する定評を他者から得られているのは事実だ。」

軍人としての命令に対する責務は果たさなければいけない。違うか?」

射殺さんとはばかりに通信設備を睨む三笠ではあるが、指揮官に言葉には賛同せざるを得ない。

「司令官直々の命令ならば、私も現地に赴いた方が良いかもしれん……」

演習から帰ったばかりで大変だが三笠、頼めるか?」

ウェールズは母港の守備隊を編成してほしい。ブルックリンは済まない、私の代理と

して執務を頼む」



部隊を急ぎ編成してへりに乗り込み、現場への急行に協力を申し出てくれた連合軍のミサイル駆逐艦に着艦した後、応援に向かう。

「これは……一体どうなつとる!？」

作戦を共にする、ミサイル駆逐艦の艦長が通信手に困惑する。

「はい、何度も確認を取りましたが、情報部は敵は量産型の小規模の艦隊が複数としか……」

「増援要請はしていたのか？」

「問い合わせましたが……無いだろうという判断でした」

「そうか。三笠、全員をブリッジに集めてくれ」

指揮官は通信手に確認をとり、通信手は指揮官にありのままを話す。そして、今回の出撃に際し、旗艦を任された三笠は通信機で出撃する仲間をここに呼んだ。

命令が下されておおよそ48時間、昼下がりの曇り空の中、海原は今や兵士達の怒号と悲鳴、血と油で満たされていた。

急行し現状を把握するまでは、ミサイル駆逐艦の艦長に挨拶し、クルーに艦船少女の紹介等を行い、和気藹々とした雰囲気であった。

……が、もはやその余裕は無い。

指揮官と艦長の視界に広がる光景は、もはや斥候での遭遇戦や威力偵察等といった小競り合いではなく、れつきとした戦場であった。

レッドアックス

敵の数は、聞いていた情報よりも何十倍に膨れ上がり、艦船少女も多くがこの戦線に投入されている。

対して、こちらは見える間に切り崩されていく守備隊と、その増援として派遣された指揮官の部隊の他に、同様の指令を受けてきた量産型部隊や同じ同業者の艦船少女を率いる部隊のいくつかだ。

守備隊は海域特有の島嶼等の地形を活かして、どうにか敵の猛攻を食い止めてはいるものの、急ぎ彼らの下へ駆けつけなければ、相手に押し切られてしまうだろう。

仮に駆けつけたとしても、これ以上敵の増援ないし・予備部隊の投入は来ないという保証はない。

この局面に置いては、数に劣る我が方は絶望的に不利である。

「艦長、これは偶発的なんかじゃない。周到に用意された作戦だ」

指揮官は携帯端末に情報を打ち込み、出てきた情報の中から結論をだした。

「そう思うか指揮官、私も同意見だ」

「指揮官、だがまだ悲観することもない」

指揮官の前フリに対して、艦長と三笠が乗ってきてくれた。

互いに並んで水平線を眺めていた指揮官と艦長は振り向くと、三笠を戦闘に今回の出撃に参加する艦船少女達が整列している。

「ああ、そうだ。」

ミサイル駆逐艦のクルーと艦船達を鼓舞するために、指揮官は努めて冷静な声色で一つ小芝居を打つ。

「現時点では、打つべき策は2つある。

1つはこの場を離れ、島嶼地帯の一部で戦線を構築、戦況を見守りつつ援軍を要請する。

敵が防衛線を突破し次第、いくつかの敵部隊をこちらへ誘い込み、地の利を活かして敵部隊を殲滅ないし撃退する漸減作戦を展開しつつ、味方の援軍を待つ方法だ

「二種の遅滞戦術とも言えるな……しかし、誘い込みによっては即全滅もありうるし、最悪なのはそのまま無視されることだな」

艦長が説明を補足する。彼はこの指揮官の意図を察し、フォローに回った。

「確かに、なるべく我々で受け持てるだけの敵を引きつける必要がありますが、この場で

戦うよりは分はあります。

幸い、相手側の将は強敵ではないようだ。証拠に、敵はアレだけの物量を持つてしても未だに守備隊を撃滅出来ていない。したがって……兵の質としては今ここにいる我々の方が上のようなだ」

指揮官が得ている情報の中では、守備隊はごくごく標準的な能力を有していること、表に出ている敵軍の識別番号やマークを確認しても、特別精強な部隊ではない事が判明している。

その割には防衛側の指揮官は良い仕事をしており、対して侵攻側の指揮官は不慣れなのか、いまいち速度に欠けていた。もしも、この場にいる指揮官が侵攻側の将ならば、とうにこの海域は制圧してもおかしくはないだろう。

「指揮官、もう一つの策……勝てる手があるのではないか？」

三笠は勿体振るなど言わんばかりの視線を投げて寄越す。見れば、そんな彼女の雰囲気を感じ取って、艦船達も一様に皆同じような——期待とこれから起こる事に対して奮起の表情を浮かべている。

そんな空気が伝播したのか艦長も笑みを浮かべ、拳を固く握りしめ、クルー達も皆一様に好戦的な笑みを熱い視線を指揮官に投げかける。

(この様子ならば、わざわざ逃げの姿勢に転ずる必要はなさそうだ)

「我々ならば、この3倍の敵であっても対等に渡り合えるだろう。

第一から第三艦隊は出撃、レッドアクシズを相当し、守備隊を救援せよ。

第四艦隊はミサイル駆逐艦を護衛だ。見える物全てに目を光らせろ、ここは最前線だ。

以上だ。もう一度、聞いておきたい事はあるか？」

「聞いたか？ 本艦はこれより彼女達の支援にはいる。レーダー、ミサイルなんだってでもいい！ 手助けをしてやるぞ！」

「第一から第三艦隊。これより、防衛線へ向かい敵軍を蹴散らすぞ！ 各員、奮励努力せよ！」



一般論として、戦争における彼我の優劣を決めるものは昔から数というのがまず基本である。

十の兵よりも二十の兵、百の兵よりも千の兵が勝るのは言うまでも無い。

この現象を論理的に説明したものととしてはランチェスターの第二法則が有名である。

しかし、実際の戦場においても兵の数がそのまま勝敗を分けるかといえは……答えはまったく違うものになる。

数で勝る勢力の方が優勢になるという理論は、あくまでも互いの兵の質がある程度同じ場合にのみ言える事。

もつと深く掘り下げるのなら、この理論の仮定として以下の事柄が挙げられる。

- ・ 前述の法則の通り、同じ軍に属する戦闘員の各人の資質・戦闘力はすべて等しい。
- ・ 戦闘には軍の全員が関わる。
- ・ 戦闘の激しさは交戦開始から戦闘の終了に至るまで、どの時刻であつても一定である。

・ 両軍の人数は非常に大きく、両軍の人数は時間微分できると近似しても問題ない。
 しかし、実際はこの仮定に完全に当てはまる事例は滅多に無い。また、訓練終了後の上がりたての新兵と長年務めあげてきた熟練の兵とは、単体としての質はまるで異なる。

加えて、それら兵士個人の力量が個体の質を決定付けるのに並ぶように、それらを束ねる軍全体の質を左右するものがある。

それが士気である。

例えば、武器を持った十の兵士達の元へ一人の兵士が襲い掛かってくる。

相手も武器を持っていて、まずは背後からの不意打ちで一人を仕留める。

その後、残りがその状況を把握しようとしている所でもう一人追加で仕留めたとする。

突然の襲撃を受け、生き残った八人はまず混乱を起こし、次にたった一人の兵士に対し恐怖を覚える事になるだろう。

八人が一齐に掛かれれば、たかだか一人の人間程度、あつと言う間に無力化出来るだろう。

だが、もしかすると一人は八人の内の一人を道連れにするかもしれない。もしそうなれば、確率にして八分の一で自分が死ぬ事になる。

そんな事を彼等は想像してしまった場合……結果として、敵味方九人を包む場の雰囲気の流れ……ペースというものは僅かな時間とはいえその一人のみに支配されるのだ。

その時には、たとえ個人の質の差が多少離れていたとしても、互いの士気は大きく開いているのである。

もし、奇襲で倒した敵が指揮官だったり、奇襲後にもう一人が現れ、少ない方の加勢したとする。

——おそらく八人はその瞬間、自らの生存確率を計算していた事だろう。

大分強引な考え方だが、この時点ですでに彼等の戦闘は決着が着いていると言ってい

い。後は如何にに勢いに乗ったまま、未だ驚愕の最中にある敵を倒すかというだけなのだから……

——詰まるところ、人間は不意の出来事に弱いのだ。

それを立て続けに起こし、相手を動揺を誘うのが士気を下げる有効な手段であり、それでもなお冷静さを保つのが優秀な兵士であり、そういう風に統率を執るのが優秀な指揮官と言えるはずだ。

では、その逆。この例えで言えば少数だった側の兵士達の士気を上げていたものは一体何か？

「どきなきいつー！ここから先はアズールレーンが領海！ 決して行かせはしない!!」

「行くぞー！我が前衛部隊の実力を思い知らせてやれー！」

三笠はサーベルを振るい陣頭指揮を執り、敵兵を次々と滅多撃ちにしながら戦場を疾駆する。

仕留め損ねた者や、隊列を組み直そうとする残りの敵兵を、間髪入れずに高雄率いる前衛部隊と第二艦隊が突き崩していく。

烈風のような突進によって陣形を崩されたところへ、周囲にいた増援部隊達も口々に雄叫びを上げ猛攻を仕掛ける。

そのあまりの勢いに対処し切れず、敵軍は統率を取り戻す間もなく、次々と散つてい

く。その様を見た他の増援部隊は更に奮起して怒号と砲声はより激しさを増す。

自軍の旗色に反比例するかのように敵の陣営はみるみる内に旗色を悪くしていった。

先ほどまでこちらが攻めていたかと思いきや、いつの間にか敵が怒涛の反撃を見せたのだ。

そのような様子を見せつけられては、敵軍の動揺のほども窺える。敵味方問わず、各部隊の士気の変動によって引き起こされている一連の連鎖反応は、今や追い詰められかけていた戦況をそのまま引つ繰り返す形にまでなっていた。

「ひいいいー何だこいつらは……っ！」

「畜生！ 聞いてねえぞツ!!」

「敵は浮き足立っているぞ！ 各員！ この機を逃がすな!!」

恐慌状態に陥る敵軍を尻目に三笠は攻撃の手を緩めない。

兵達の士気を最初から格段に上げる方法はそうは無い。あるにはあっても、その方法はいずれもたやすいことではない。

軍隊の士気を高めるものは、これまでの戦闘で成功と勝利を積み重ねに裏打ちされた自信と、指揮する者のカリスマ性である。

名だたる名将・智将達には、その称号を得る前からか得た後かは別として、もれなくこの能力が備わっていた。

指揮や統率などとは言うものの、戦場で下す指揮はある程度熟練した者達ならば、概ねは似たようなものである。指揮能力とは、奇抜な策を編み出すものでは無く、本来は堅実さと信頼性に重きを置くようにあるからだ。

ならば、その指揮官達の優劣を決めるのは如何なものだろうか？

——その答えこそが、カリスマなのだ。

凡将と名将、その裁量が同じであれば、兵士はどちらの下でならより自信を持って力を振るえるか？

答えは言うまでも無く後者となり、前者たる凡将が名将の相手であれば、なおその意気は高まる。

そして、カリスマ性とは指揮者本人の武勇や容姿、ないし智謀や人徳、家柄等に多分に依存するものだ。

——そう、それを確かだとするのなら……

「主砲装填、一斉射！撃てえッ!!」

——重桜の戦艦である三笠は間違いなく名将足り得る要素を有していた。

「中枢艦隊旗艦、この三笠が貰い受けた！我が艦隊に栄光があらんことを！」

もはや蜘蛛の子を散らしたかのような惨状のレッドアクシズの部隊に、追い討ちを掛けるように三笠が首級を掲げ高らかに宣言し、それに呼応してあちこちから兵士や艦船

達の勝ち鬨の雄叫びが聞こえた。

窮地を立て直すのにやや骨を折る形となってしまったが……ともあれ此度の戦いは、無事アズールレーン陣営の勝利に終わった。



「指・揮・官」

戦闘が終わり、ミサイル駆逐艦が自分たちの母港に帰投する間、充てがわれた部屋で指揮官は報告書を纏めていた。船内故に士官用であつてもデスクとベッドしか無い小さな部屋に三笠は訪れていた。

「三笠か、今日はご苦労だった。

君のおかげだよ」

指揮官は紙コップも取り出して、コーヒーを注いで三笠に渡した。

せつかく部屋に訪れた彼女を立てたままのわけにもいかず、指揮官はベッドに腰かけ、椅子を三笠に明け渡そうとする。

「我はここに居たい……いいか？」

「ぬう……」

三笠はやんわりと断った後、コップを机の上に置いてそのまま指揮官の太ももを枕にしてこてんと横たわった。

指揮官も三笠には世話になっており、断るには躊躇せざるを得ない。

「勝利の果実がこれなら、悪い気はしない」

「そうか……」

皆から大先輩と慕われる彼女は常に何かしらの期待や信頼を寄せられる。

それは重桜だけでなく、その歴史と出自からかロイヤルやユニオンの艦船達にも寄せられる。

皆のプレッシャーに応えなければならぬこと、そして規範となるように……あるいは精神的な支柱にならざるを得ないこと。これらの重圧が三笠ただ一人にのしかかることは想像に難くない。

その反動だろうか、彼女は指揮官に特段甘える事があった。

普段はそうでもないのだが、秘書艦の時やこういった戦闘で指揮を執った際にこういった態度を彼女はよく見せた。

「……指揮官と一緒になら、さらなる高みへ行ける。我だけでは届かない高みに

指揮官。指揮官はこんな女は嫌いか？」

不安が混じった視線で、三笠は指揮官を見上げる。

普段は凜々しく、頼れる先輩である彼女の弱々しい一面を見ることが出来て、指揮官としては少しうれしい半面、艦隊の運営の成否には自分が深く関わっていることを実感し、気が引き締まる思いでいた。

「いいや」

「えへへ、よかつたあ」

返事と同時に、頭と角を撫でて。言葉が真実であると彼女に伝える。

指揮官の言葉と態度で意図を受け取った三笠は満足そうに笑みを浮かべて、左手の指輪を見つめる。

——これは誓いの指輪を渡した後に始まった儀式のような物である。

偶には誰かに甘えてみたい三笠が、指揮官に恥を忍んで頼んだことがきつかけで始まったそれは、やがて前述の通り、秘書艦の日や戦闘で指揮を執った日の最後にこうやってスキンシップを図っていた。

「三笠、君は皆の頼れる先輩だ。……だが、一人の艦船でもある。

偶にはゆつくりと休めばいい。そのために私がいる」

「ありがと……」

皆が寝静まった中、指揮官と三笠の時間はゆつくりと流れていくのであった。